

二八 銃ヲ使用セシ時ハ直ニ拭淨ヲ行フヘシ假令如何ナル事情アルモ
他事ニ先チ之ヲ勵行スルコト緊要ナリ

第五章 武器附屬藥盒其他革具ノ手入法

- (一) 革具ハ左ノ諸種ナリ
前方彈藥盒(前盒)後方彈藥盒(後盒)劍差、帶革、附屬革、負革
- (二) 革質ニ依リ手入法ヲ異ニス
褐色堅牛革(前盒ノ蓋各盒ノ裏革隔板)褐色多脂牛革(堅牛革以)ノ二種ノ、
革ヲ以テ作ラレ
褐色堅牛革ハ塗油ヲ少量ニシテ其變形ニ留意シ褐色多脂牛革ヨリ成ル部
分ハ稍多量ヲ塗油スルヲ要ス
- (三) 總テ革具ニ脂油ヲ施スニハ革ノ表面ヨリ始メ而シテ多量ヲ塗ルヨリ合

油布片ヲ以テ摩擦シツ、數度ニ少量ツツ平等ニ吸收セシムルヲ良シトス
(四) 革具手入ヲ爲スニハ其塵埃汚垢ヲ除去シタル後ニ適度ナル脂油ヲ施シ
保存スルコトヲ得

(五) 總テ革具ハ常ニ鞣軟平滑ナルヘシ其保存完全ニシテ脂油適當ナルモノ
ハ試ニ革ヲ屈折スレハ其部ニ龜裂ヲ生セズシテ稍變色スルモ原形ニ復
スレバ革色モ亦元ニ復スルモノトス

第十四課 赤十字條約ノ大要

一 赤十字條約トハ博愛仁慈ノ本旨ヨリ敵味方一視同仁ト云フ事ヨリ其
負傷シテ戰鬥ノ力ナキ者ハ敵ト見做サズ親切ニ救助シ取扱フ事ヲ世
界各國ニテ協議シタルモノニシテ我(元治元年)八月瑞西國(チネー
ブ府)ニテ合議成立セルヲ以テ之ヲ(チネーブ)條約ト云フ我日本帝

知 須 兵 重 輜

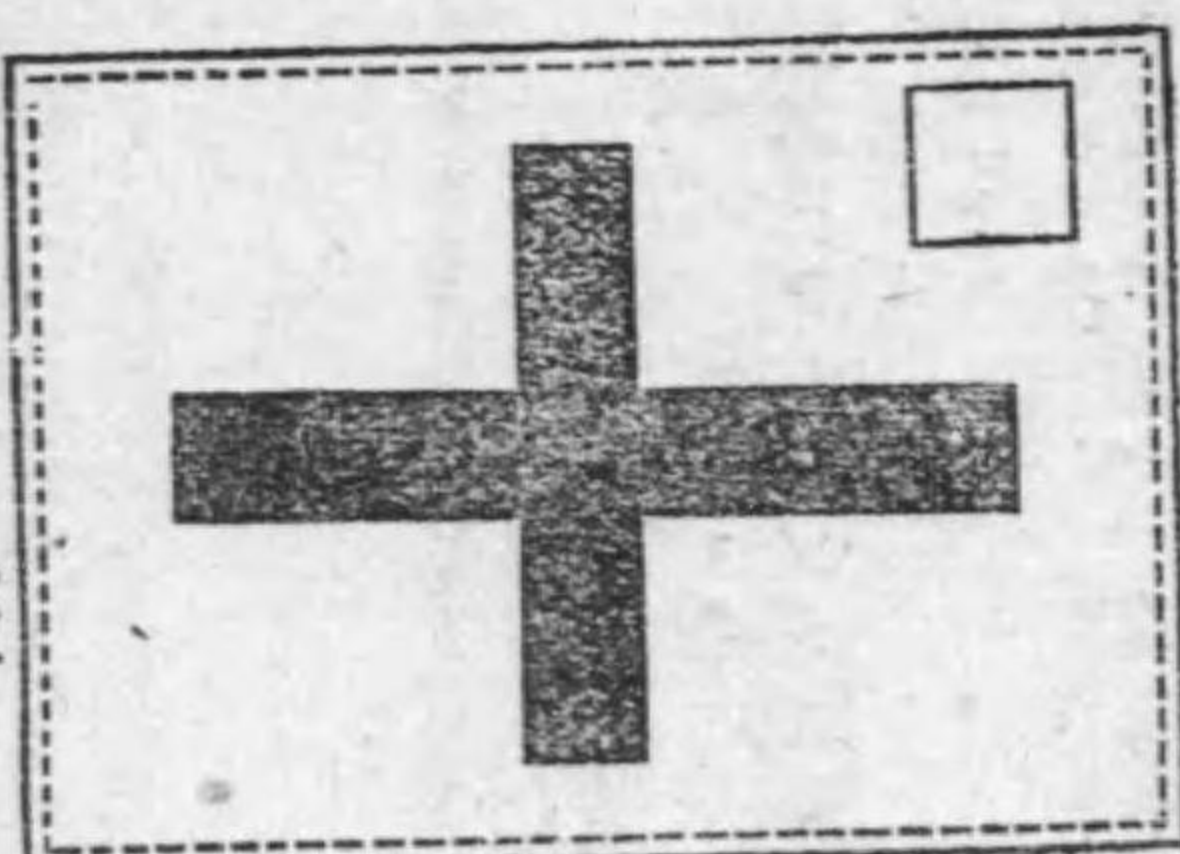
國ハ明治十九年六月五日
 天皇陛下ガ此條約ノ保護ニ依リ我軍人ヲモ其幸福ヲ受ケシメントノ
 思召ニヨリ「ヂネーブ」條約ニ御加盟アリ更ニ明治三十九年七月六
 日此條約ノ改善同盟ニ御批准アリタリ
 赤十字條約中兵卒ノ心得ベキ件

- 一 對敵者我が爲メ負傷シテ其負傷者又ハ病者ヲ遺シテ退カバ患者ハ
 之ヲ 懇ニ取扱ヒ決シテ害ヲ加フル可ラズ
- 二 彼我ヲ問ズ病院ニハ赤十字徽章(白地ニ赤キ十字)ト又其國旗ヲ
 掲示シアレバ射撃ヲ向クルコトヲ許サズ
 但シ敵若シ武器ヲ用ヒテ守護又ハ抵抗スル時ハ此限りニ非ズ
- 三 患者ヲ救護スル人員(敵味方ノ軍醫)ハ臂ニ赤十字ノ章ヲ帶ビア
 レバ之ニ對シテモ射撃又ハ害ヲ加フル可ラズ救護用ノ器具ニモ亦害ヲ

知 須 兵 重 輜

加フル可ラズ

四 兩軍死傷者ヲ收容ノ時ハ一時休戦シ互ニ擔架ヲ出シ之ヲ收容スル
 コトアリ此ノ如キ場合ハ約束ノ時限内決シテ發射ス可ラズ



章徽字十赤軍陸時戰

長 六寸 幅 四寸
 赤十字長徑 四寸 同短徑 三寸
 同幅 陸軍省參謀本部ノ印章 五分

第十五課

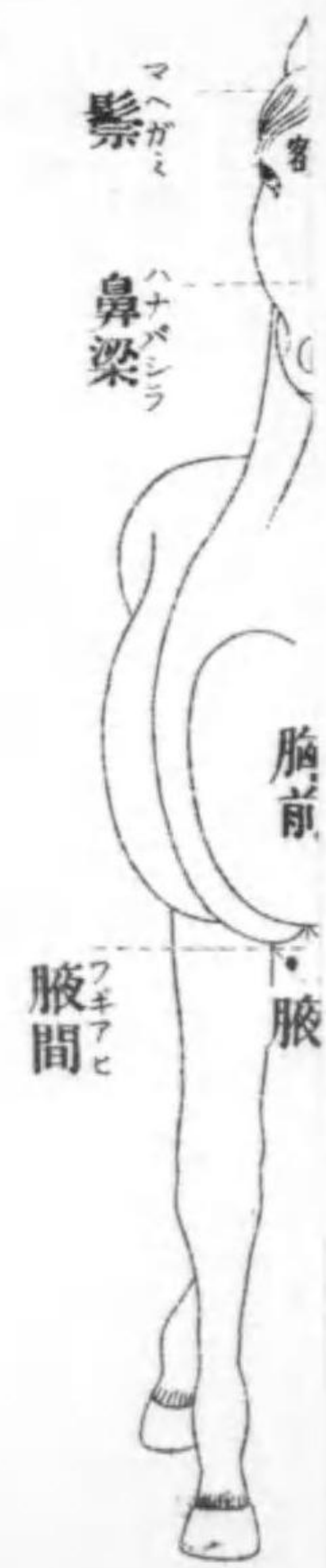
駄馬具輜重車輛器具材料

ノ名稱及裝鞍、脱鞍法並

手入法

第一章 駄馬具ノ名稱

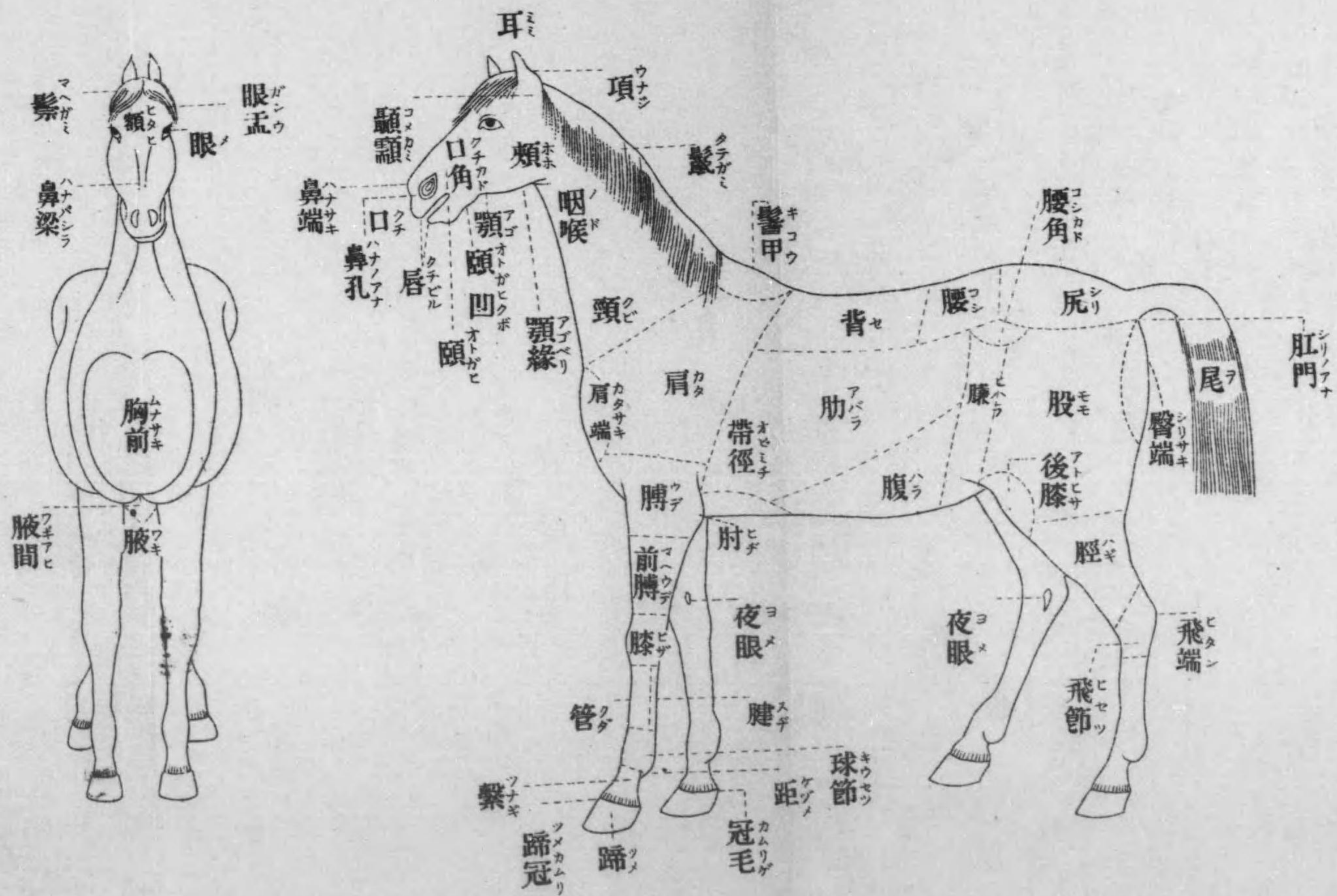
- 一、駄馬具ヲ大別シテ駄鞍及屬品ノ二ト爲シ、駄鞍ヲ大別シテ鞍骨及鞍褥ノ二トス
- 二、鞍骨ノ名稱ハ、前穹木、後穹木、居木、力木ノ四トス
- 三、穹木ヲ細別セバ、鈎、副鐵、鞞繫銀、紐トス
- 四、居木ヲ細別セバ、腹帶繫銀、駐草、蹄鐵囊駐螺子等トス
- 五、鞍褥ノ名稱ハ、前居木駐草、後居木駐草、縮草、替銀、褥表、褥



齒、齒齦、銜受、舌、上顎、下顎、陰囊、陰筒、乳房等ハ圖示セス

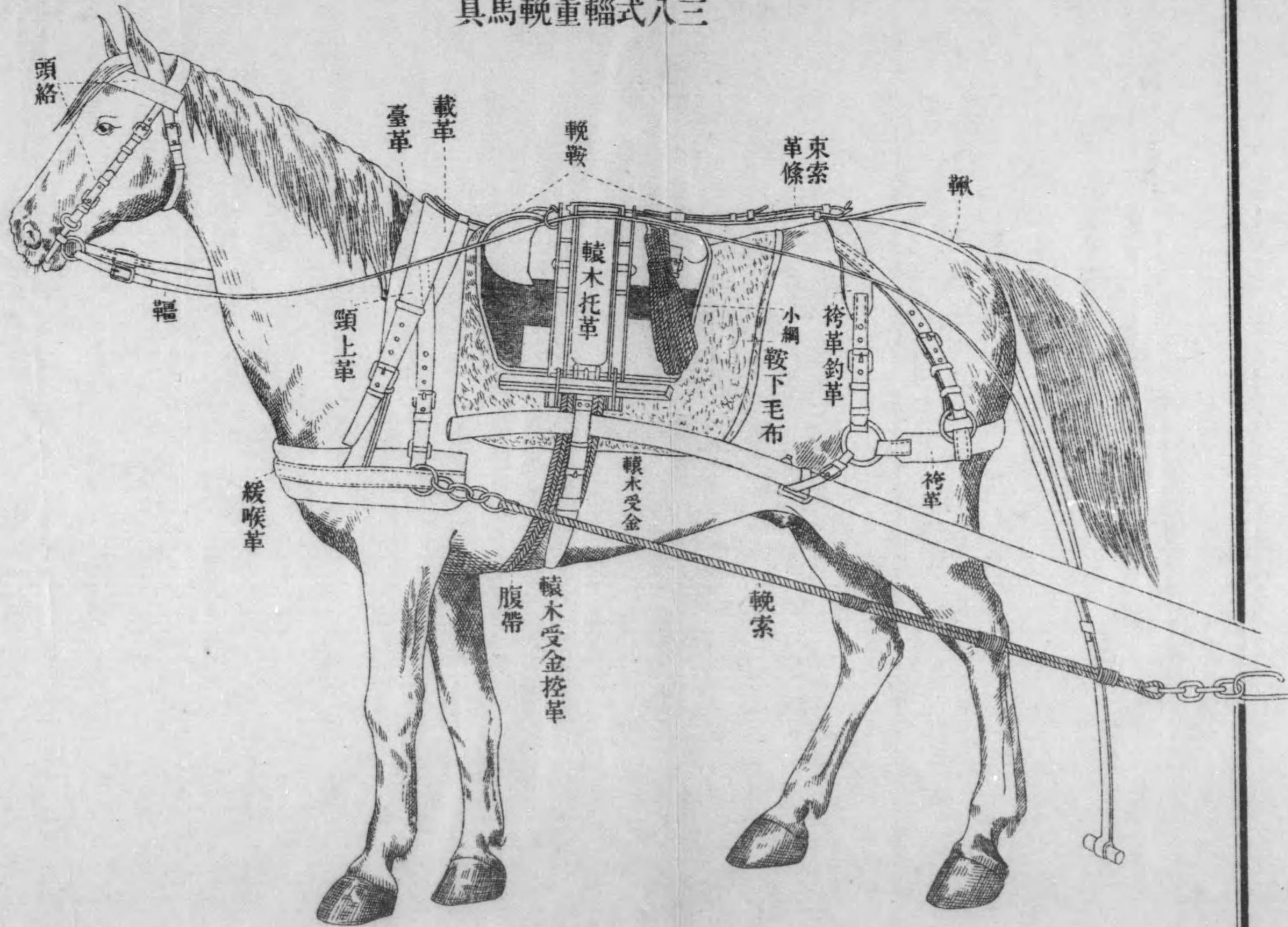
馬體外貌名稱

齒、齒齦、銜受、舌、上顎、下顎、陰囊、陰筒、乳房等ハ圖示セス



- 一、駄馬具ヲ大別シテ駄鞍及屬品ノ二ト爲シ、駄鞍ヲ大別シテ鞍骨及鞍褥ノ二トス
- 二、鞍骨ノ名稱ハ、前穹木、後穹木、居木、力木ノ四トス
- 三、穹木ヲ細別セバ、鈎、副鐵、鞞繫銀、紐トス
- 四、居木ヲ細別セバ、腹帶繫銀、駐草、蹄鐵囊駐螺子等トス
- 五、鞍褥ノ名稱ハ、前居木駐草、後居木駐草、縮草、替銀、褥表、褥

具馬輓重輻式八三



頭絡

臺革
載革

輓鞍

束索
革條

鞅

轡

頸上革

輓木托革

袴革鈞革
小綱

鞍下毛布

緩喉革

輓木受金

袴革

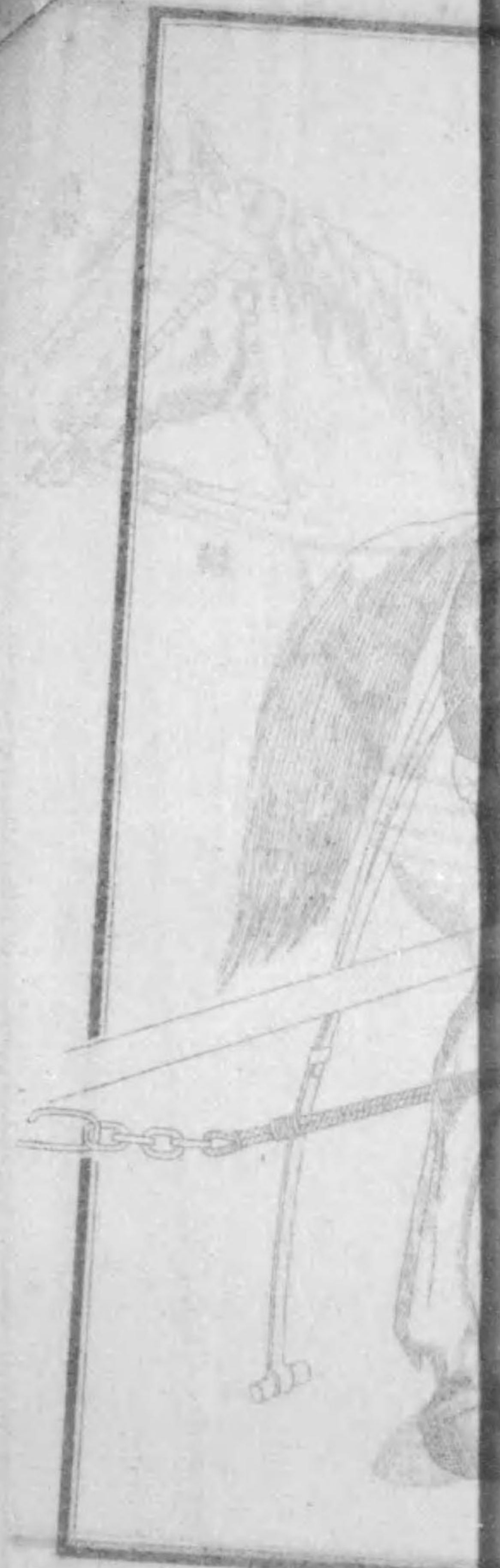
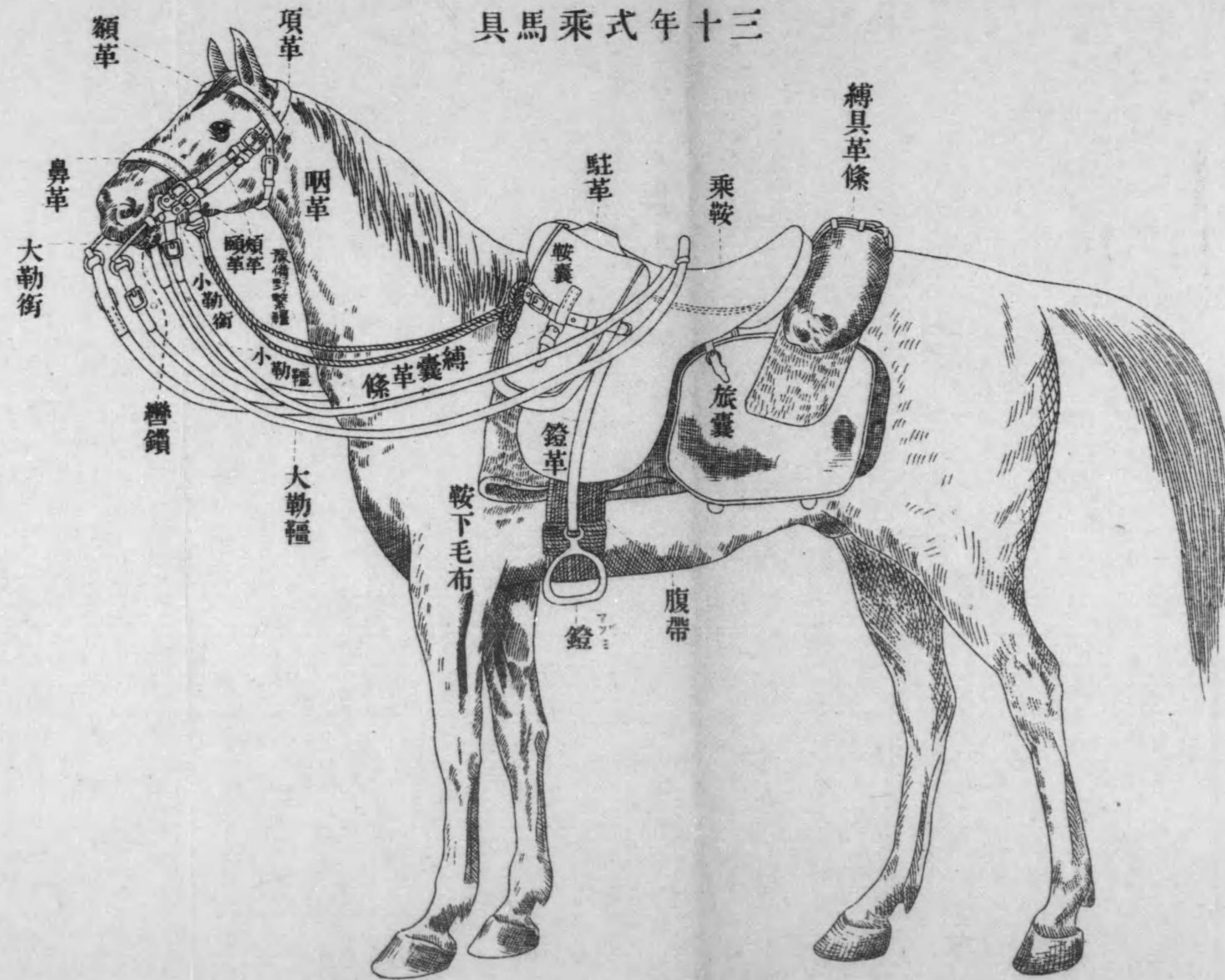
輓木受金控革
腹帶

輓索

頂門

新器

具馬乘式年十三





裏及褥心等トス

六 屬品ノ名稱ハ、頭絡、鞆、鞞、腹帶、蹄鐵囊、締綱、鞍下毛布、

雨覆、小綱、携帶馬糧囊、麥袋、水與器等トス

七 頭絡ノ名稱ハ、項條、額條、鼻條、頤條、立緒、小緒、纏銀、簪

轡銜、釣金副銀、轡銀、牽綱、蛇口、端緒、韁等トス

八 締綱ノ名稱ハ、鎖、締銀、繫革、蛇口及綱等トス

第二章 駄馬具ノ裝鞍及脫鞍

一、鞍ヲ裝スルノ順序次ノ如シ

第一ニ鞍下毛布ヲ執リテ正シク四ツニ折リ其折目ヲ前及右ニシテ馬背

ニ置キ、次デ毛並ヲ正ス爲ニ前方ヨリ後方ニ引キタル後左側ヨリ駄鞍

ヲ馬背ノ少シク後方ニ置キ鬚甲部ノ毛布ヲ高メ、斯クシテ後馬ノ後ニ

至リ尾ヲ握リテ之ヲ一束トシ尾根ヲ鞅尾ニ通シ鞅ヲ正シ鞅ト執リ
胸前ヲ經テ其枝緒ヲ左ノ鞅繫ニ通ル引キ解ニ結ビ、次テ腹帶ヲ執
リ右帶ノ締革ヲ左帶ノ銀ニ數回通シテ堅ク締メ其餘リヲ二ツ折ト爲シ
卷テ又之ヲ締ムルモノトス

二、駄鞍及頭絡ヲ適合ナラシムルノ注意次ノ如シ

一、鞍下毛布ハ能ク馬體ニ密着シ、少シモ皺ヲ生セザル事ニ充分注意
スヘシ

一、鞅ハ鞅及尻トノ間ニ平手ヲ挾ミテ遊動シ得ルヲ適度トス（或
ハ尾根ヲ水平トシテ鞅ト尾根ノ間ニ指二本入ル、丈ケ）

一、腹帶ノ位置ハ前肢ノ附着部ヨリ約一掌幅後方ニ在テ二指ヲ腹帶徑
ニ挾ミテ遊動シ得ルヲ適度トス

一、鞅ノ下部ハ胸部ノ上部ニ在テ其中央ト胸前トノ間ニ拳ヲ入レ得

ルヲ適度トス

一、駄鞍左右前後ニ動揺スルトキハ、直ニ馬體ヲ損スルヲ以テ最モ注
意シ常ニ眞直ニ馬背上ニ位置セシムヘシ

一、小緒ノ締方ハ、小緒ニ咽喉トノ間ニ平手ヲ挾ミテ遊動シ得ルヲ適
度トス

一、轡銜ノ銜ミ方ハ、口角ニ二三ノ皺ヲ表ス位ヲ以テ適度トス
一、控綱ノ控ヘ方ハ、馬ノ頭ガ自然ノ姿勢ニ在ル時稍々纏銀ニ感ス
ル程度ヲ以テ適度トス

三、鞍ヲ脱スル順序ハ裝スル時ト反對ノ順序ニ依ルモノトス

四、頭絡ノ裝法ハ之ヲ左手ニ持テ牽綱、控綱ヲ左腕ニ掛ケ馬ノ左ヨリ
右手ヲ頤凹ノ下ヨリ右側ニ出シ右ヘ口角ニ食指及中指ヲ入レ齒ニ觸レ
ザル様注意シ左手ヲ高クシ徐ニ轡銜ヲ銜マシメ、次テ項條ト額條トノ

間ニ右耳ヨリ左耳ヲ入レ、鬚ヲ引出シテ小緒ヲ締メ控綱ハ前穹木ノ控綱繫環ニ通シ折返シテ再ヒ環ニ通シ左右同ジ長サニ爲シテ結ブ而シテ其脱シ方ハ之ト反對ノ順序ニ依ルモノトス

第二章 駄馬具ノ手入法

- 一、駄馬具手入ハ馬匹ヲ損傷セシメス保存ヲ良好ニスル爲メナリ、サレバ歩兵カ銃ヲ大切ニスル如ク、輸卒ハ充分駄馬具ヲ大切ニセザルカラズ
- 二、革部ノ手入法ハ一般ニ左ノ注意ヲ要ス
 - 一、使用セシ度毎ニ必ズ清拭シテ常ニ塵埃或ハ腐油垢汗等ヲ附着セシムベカラズ
 - 一、塗油スル前ニハ必ズ清潔ニ拭フベシ

- 一、總テ外面ニ油氣ヲ浮ベ置クトキハ直ニ塵埃附着シテ不潔トナルヲ以テ充分乾布ニテ拭ヒ去ルベシ
- 一、馬體ニ感觸スル程度ト韌性ヲ要スル程度トニ應シ各部ニ於テ自ラ塗油ノ加減アルベシ
 - 一、若シ濡レタルトキハ能ク清拭シ脂ヲ塗リテ乾スベシ、然レドモ決シテ日光ニ曝シ又ハ火ニテ乾スベカラズ
- 三、木部ノ手入法ハ布片ニテ充分ニ拭フモノトス
- 四、頭絡銜ハ鍍錫シアルヲ以テ磨粉ナドヲ以テ磨クコトナク藁ニテ叮嚀ニ掃除スヘシ
- 五、麻布ノ手入法ハ使用セシ度毎ニ能ク塵埃ヲ去リ、水氣ヲ受ケシトキハ直ニ之ヲ乾シ若シ泥ニ塗レタラバ水ニテ洗フヘシ
- 六、鞍褥及鞍下毛布ノ手入法ハ、褥面ヲ日乾又ハ陰乾ニシ馬汗ニ依リ

一八八
テ濕リタルヲ乾シ能ク塵埃ヲ去リ褥蟲ノ生ゼザル様注意スヘシ
七、雨覆ノ手入法ハ常ニ清潔ニ乾燥シ置クヘシ若シ雨ニテ濡レタルトキハ直ニ日光ニ曝シテ之ヲ乾シ、又汚レタルトキハ洗濯スルモノトス

第四章 二輪輜重車ノ名稱

- 一、車輛各部ノ名稱、車臺、踏板(踏板支鐵)車軸、鏡鈹、遊動棍、輾木、車輪、支柱木、聯接鐵、屬品
- 二、車臺要部ノ名稱、縱木、橫木、底板、荷綱掛、荷綱掛鈎、支柱木駐鈹、支柱木駐鈎、油筒受金、油筒控革、螺鈹控革、脚鑽、脚鑽托鈹、螺鈹受金
- 三、車輛要部ノ名稱、軸身、軸臂、軸轄
- 四、遊動棍要部ノ名稱、桿箍鑽、輾網鈎、連綴鈎

- 五、輾木要部ノ名稱、扶鈹、駐鐵、駐鐵樞軸、銜革留金
- 六、車輪要部ノ名稱、網、輻、殼、輪鐵、圓鈹、殼帽、纏帽革條
- 七、屬品ノ名稱、荷綱、雨覆(二枚) 自在螺鈹、油筒、脂肪罐、提灯箱

第五章 四輪輜重車ノ名稱

- 一、車臺各部ノ名稱、車臺、踏板、踏板支鐵、車軸、鏡鈹、遊動棍(桿輾網鈎)、輾木、車輪(前輪後輪)(前後輪共各部ノ名稱) 導鈹、支柱鐵、轉鈹架、縱軸、屬品(雨覆ヲ除キ其他ハ)
- 二、車臺要部ノ名稱、縱木、橫木、底板、縱軸支木、軸架、舟架、舟扯板、荷綱掛、油筒受金、油筒控革、螺鈹控革、螺鈹受金、螺鈹
- 三、車軸輾木要部ノ名稱ハ二輪輜重車ニ同ジ
- 四、縱軸要部ノ名稱、縱軸栓、縱軸割栓、駐鈹

第六章 器具材料ノ名稱

- 一、輜重車輛用提灯（細部ノ名稱ハ略ス）
- 二、輜重携行器具ノ名稱、圓匙、十字鋏、兩頭槌、山刀、車輛撐材、山鋸、
- 三、二輪輜重車附屬材料ハ第一種（架橋器具材料用）舟架、第二種（架橋器具材料積載用）框第三種（衛生材料天幕積載用）橫木受金ノ三種トス

第七章 車輛野外修理法

- 一、車輛野外修理トハ、車輛ノ破損シタル部分ヲ修理シ其日ノ行軍ヲ終ルマテ一時ノ間ニ合スル爲ニ行フモノヲ云フ
- 二、野外ニ於テ車輛ニ破損ヲ生ジタル時ハ其部分ト破損ノ如何ヲ問ハズ

直ニ之ヲ修理スルヲ要ス

- 三、修理材料ハ平常ヨリ副木、銅線、鐵線、麻繩等ノ準備ヲ爲シテ演習ヲ行フト雖モ野外ニ於テ携行ノ修理材料盡キタルトキハ、臨時ノ應用トシテ竹或ハ木板等ノ地方材料ヲ代用シテ行フモノトス
- 四、輜木縦ニ裂目ヲ生ジタルトキハ、麻繩或ハ銅締若クハ鐵線ニテ其損所ヲ堅ク卷キ結ブ其方法ニハ種々アリト雖モ要ハ堅確ニシテ終日使用スルニ差支ナキヲ程度ト爲ス
- 五、輜木挫折シタルトキハ、其部分ヲ接合シ得レハ其長キニ從ヒ二個所若クハ三個所麻繩又ハ銅線若クハ鋼線ニテ結ブ、若シ其部分接合シ能ハザレバ副木若クハ代用品ヲ添ヘテ前法ヲ行フ、此場合ニハ釘ヲ以テ輜木ヲ固着スルコトモ亦一ノ修理法トス
- 六、輜木ノ損所大ニシテ一時ノ修理ニテ使用スルコト能ハザルトキハ、

其輜木ヲ脱シ他ノ豫備輜木ト取り換フヘシ、然レドモコノ豫備輜木ハ
數多ク携行スルモノニ非ザルヲ以テ成ルヘク充分ノ修理ヲ施シテ豫備
輜木ヲ使用セザル事モ努メサルヘカラズ

七、輜ノ挫折シタルトキハ、其部分ニ副木若クハ代用品ヲ添へ麻繩又ハ
銅線若クハ鋼線ニテ一個所若クハ二三個所結ヒ付ケテ之ヲ修理ス

八、輜ノ縦ニ裂目ヲ生ジタルノミナラバ、副木或ハ代用品ヲ使用シテ之
ヲ堅ク結着スベシ

九、輜僅カニ装目ヲ生ジ若クハ緩ム徴アルトキハ、副木ヲ當テ若クハ其
儘銅線或ハ鋼線ヲ以テ輜及輪鐵ヲ結ビ付ケテ修理ヲ施ス、サレドコ、

ニ注意スヘキハ銅線等ヲ以テ輜ヲ結ブモ車輪回轉ノ際土地ニ觸レテ磨
擦シコノ銅線等ノ自然ニ切斷サル、場合多キヲ以テ、布片或ハ藁ヲ以
テ車輪ノ部ヲ巻キ銅線等ノ其布片中ニ中ニ入リテ直接地面ニ觸レザル

樣爲スヲ緊要トス

第八章 二輪輜重車輜具ノ名稱

- 一、輜具ヲ大別スレバ、輜馬勒、輜鞍、頸上草、緩喉草、腹帶、輜木、
受金、輜綱、鞞、袴革、蹄鐵囊、結揭、小綱、鞍下毛布等トス
- 二、輜鞍ノ名稱ハ、鞍鞍、鞍褥、輜受、頸上草托銀、控綱托銀、鞞
托銀、蹄鐵囊托銀、腹帶托銀、受金托銀等トス
- 三、輜馬勒ノ名稱ハ、頭絡（項革、額革、咽草、頰革）、韁（留木）、控韁
銜トス
- 四、輜具屬品ノ名稱ハ、携帶馬糧囊、水與器、麥袋、小綱トス

第九章 輜具ノ裝法

一、輓具ヲ装スルノ順序次ノ如シ

第一ニ鞍下毛布ヲ取りテ正シク四ツ折トシ、其折目ヲ右及前ニ中央ヲ
 鬚甲ヨリ少シク後ニ置キ此部ニ結揚ヲ裏返シニ掛ケ毛布ヲ前後ヨリ折
 リテ結揚ヲ包ミ然ル後毛布ノ皺ヲ展ハシ鬚甲ノ部ヲ高メテ置キ、次ニ
 鞞及袴革ヲ右腕ニ掛ケ緩喉革、頸上革並ニ輓綱ヲ鞍上ニ重ネ兩
 手ニテ之ヲ持チ靜ニ馬背ニ置キテ尾ヲ握リ束ネテ先ヅ袴革ニ通シ尾根
 ヲ鞞ニ通シテ正シク其位置ヲ直シ腹帶ヲ結揚ニ重ネ左側ニテ締メ以
 テ鞞ト袴革トヲ適度ト爲ス、斯シテ緩喉革ヲ胸前ノ上部ニ適合シ其
 左托革ヲ頸上革ニ掛ク此時左右ノ托革ノ長サヲ平均ニシ以テ左輓綱ノ
 鉤ヲ緩喉革ノ連鎖ニ掛ケ端革ニテ控ヘ又控輻ヲ控輻托環ニ通シ適
 度ノ長サニ量リテ美女環ニテ留ム

二、裝鞍ノ節注意スル要件次ノ如シ

- (一) 揚結ハ緩縮適度ニ締メ其簪環ハ馬體ニ觸レザル様ニスヘシ
- (二) 輓鞍ハ其前端鬚甲ノ後方肩胛骨ノ中央ヨリ一掌幅後ニ在リテ鞍下毛
 布ノ中央ニ正シク位置セシムヘシ
- (三) 腹帶ハ正シク結揚ノ上ニ重リ帶徑及腹帶ノ間ニ指ヲ遊動シ得ヘキ位
 置ニテ締ムベキコト、但シ緊キニ過キズ緩キニ失セザル様注意スベ
 シト雖モ結揚ハ充分緊締ムヘシ、輓鞍裝法ニテ通常起ル弊害ハ結揚
 締方緩ク腹帶ノ締メ方却テ強キニアリ其原因ハ繫駕ノ後、轅木端ノ
 重量ニ依リテ腹帶弛ム爲メ之ヲ締ムルモ其際結揚マテ締メ直スノ注
 意ヲ怠ルニ依ル
- (四) 鞞ハ臀トノ間ニ平掌ヲ挾ミ得ル様又鞞尾ト尾根トノ間ニ二指
 ヲ入レ得ル様ニ位置セシムベシ(此時尾根ヲ水平)
- (五) 袴革ハ馬腿ニ輕ク觸レ其下端ハ後膝ノ上部ニ在リテ水平ナルヘシ

(六) 頸上革ハ正シク警甲ノ上ニ在リテ成ルヘク輓鞍ニ近接スヘシ
(七) 緩喉革ハ水平ニ位置シ其下端肩端ノ上部ニ在リテ能ク胸前ニ添フヘシ

一九六……一九八

第十章 輓具ノ手入法

- 一、鞍褥ハ褥蟲ノ生ジ易キヲ以テ、時々日光ニ曝シ馬汗ヲ拭ヒ塵埃ヲ拂除クベシ
- 二、革部ノ手入法ハ駄馬具ノ要領ト同ジト雖モ尙ホ馬體ニ觸ル、部分ヲ清潔ニシ充分脂ヲ塗リテ軟ナラシムベシ
- 三、麻部ノ手入法ハ泥土、垢、汗等ヲ洗ヒ乾シ後收縮ヲ伸バシ軟ナラシムベシ

第十六課 衛生法大意

軍人ノ身體ハ 天皇陛下ニ捧ゲシ身ニシテ陛下ノ股肱テアル平時病ヲ恐レ有事死ヲ厭ハサルモノナリ故ニ大切ニナシ決シテ不衛生ノコトヲ爲ス可ラス又軍隊ハ多クノ人生活ヲ共ニスルモノ故ニ一度兵營内ニ傳染病發生シナハ其蔓延ハ實ニ恐ルヘク他人ニ迄害ヲ及ス故ニ軍人タル者ハ陛下ノ御爲メ我身ノ爲メ他人ノ爲メ衛生ヲ怠ル可ラス
此衛生ノ道ヲ衛生ト稱ス

- 一 一般ノ衛生
 - 一 啖唾ハ啖壺ニ爲スヘシ
 - 二 靴ハ泥土ヲ善ク拂ヒテ舍内ニ持チ込ムヘシ

三 眼病患者ハ洗面器ヲ一定ニ用ユヘシ
 四 下痢患者ハ下痢患者ノ入ル厠ニ登ルヘシ
 五 兵舎内ニ濕リタル被服等ヲ乾燥ス可ラス
 七 時々寒氣ノ時ト雖モ窓ヲ開キ空氣ヲ新鮮ニスヘシ但シ夜間必ス閉テ寢ル

右ノ事項ハ自己ノ爲メナラス舎内全班ノ者ノ衛生トナルコトナレハ各自ノ注意スルヲ要ス

二 個人ノ衛生

各人ノ健康ヲ保ツ爲メニ各季節ニ應シ左ノ件ヲ注意スヘシ

夏期

一 夏期ニ起ル病氣ハ赤痢コレラ腸室扶斯等多ク重ニ胃腸ヲ害スル故ニ飲食物ニ注意スヘシ殊ニ生水ヲ飲マサル事又多量ニ飲食セサル事

二 左之品ハ夏期ニ食スヘカラス
 タコ、介類、エビ其他生魚、こんにやく、油揚天ぷらノ類、ソバ、ソウメン、カンテン、アンモノ、氷水、不熟ノ果物

三 總テ燒キタルモノ煮タル物ヲ食ス消化悪シキ品ヲ食フヘカラス、腹卷ヲ爲シ寢冷セサル如クスヘシ、身體ヲ清潔ニ爲ス事、汗多キ襦袢袴下ヲ用ユヘカラス。

冬期

冬期ハ寒胃、實扶的里、肺炎、鼻加多兒等多ク重ニ呼吸ノ病多シ

一 發汗後直ニ冷氣ヲ皮膚ニ觸シムル勿レ

二 急ニ暖爐ヲ去リ寒氣ニ觸レ又ハ寒氣ヨリ急ニ暖室ニ入ルコトヲ避クヘシ、炭火ニ暖ヲ取ルハ大ニ害アリ

三 毎朝冷水濕拭ハ大ニ寒胃ヲ豫防シ得、夜間窓口ノ戸ヲ開放シ賊風

ニ犯サル、コト勿レ

第十七課 勤務之概要

第一章 衛戍勤務

- 一 衛戍勤務ハ、平時衛戍地ノ治安ヲ維持シ、且ツ事變ニ際シ人民ヲ保護スルヲ以テ目的トス
- 二 衛戍トハ、陸軍軍隊ノ永久一地ニ駐屯スルヲ云フ
- 三 衛戍司令官ハ、其地所在ノ最高級故參ノ團隊長(東京ハ衛戍總督)トス
- 四 衛戍勤務ハ主トシテ衛戍衛兵及衛戍巡察トス
- 衛戍衛兵一般ノ心得
 - 一 平時ニ於ケル衛兵勤務ハ、最モ戰時警備勤務豫習トナルモノナレバ

- 其責任ヲ實務ニ盡スヘキ心得ヲ以テ服務セサルヘカラス
- 二 控兵ハ、常ニ武裝ヲ整ヘ不時ノ呼集ニ應スルコトノ出來得ル様用意ヲナシ置クヘシ又休暇日ト雖モ外出スルコトヲ得ス
- 三 夜間衛兵ハ、衛兵全員ノ三分ノ一ノ外ハ、假眠スルコトヲ得ス、又就假眠スルトキハ帽、銃、劍、彈藥盒及脚絆ヲ着ケタルマ、ニシテ決シテ服裝ヲ亂スヲ許サルコト

歩哨ノ職務

- 歩哨姿勢 歩哨ハ擔銃 或ハ立銃ヲ爲シ常ニ姿勢動作ヲ正シクシ用務ノ外他人ト談話スヘカラス又頭布ヲ冠ル可ラス
- 歩哨位置 歩哨ハ哨舎ノ近傍三十歩以内ヲ行動スルコトヲ得ルト雖モ爲メニ看守ヲ怠ルヘカラス
- 歩哨ハ耳目活動シ警戒ヲ怠ル可ラス

○歩哨ハ歩哨掛ノ引率セシ兵ニ非サレハ交代スヘカラス又衛戍司令官同副官、衛兵司令下士、上等兵及巡察又ハ直屬士官ニアラサレハ他人ニ其守則ヲ語リ或ハ他人ヨリ更ニ守則ヲ受クヘカラス

○歩哨ハ雨雪天ノ時ハ哨舎ニ入ルコトヲ得但シ特ニ警戒ヲ要スルトキ又ハ敬禮ヲ要スル時ハ哨舎ヨリ出ツヘシ

○歩哨ハ衛兵所又ハ隣歩哨ニ警報スルニハ「氣ヲ著ケ」ト呼ベシ

○銃前歩哨ハ非常號音ヲ聞クカ又ハ左ニ掲クルモノ及巡察將校ノシ
ルヲ望見セハ「整列」ト呼フヘシ

天皇、皇族、軍旗、部隊
元帥、陸軍大臣、參謀總長、教育總監、臺灣總督、陸軍大將、特命
檢閱使タル將官

○夜間又ハ別命アラサレハ銃ハ劔ヲ附セス

衛戍巡察

- 一 巡察ニ二種アリ、第一種巡察、第二種巡察是ナリ
- 二 巡察將校ハ勤務ノ記章ヲ帶フ
- 三 巡察下士ハ武装ス、但シ曹長ハ背囊ヲ負ハス只外套ノミヲ携フ
- 四 第一種巡察ハ主トシテ衛兵ノ勤怠ヲ監視スルモノニシテ第二種巡察ハ休日等ニ外出スル餘ノ軍人ノ非違ヲ戒ムルモノナリ

第二章 風紀衛兵

- 一 風紀衛兵ハ、營内ノ軍紀風紀ヲ取締リ且ツ兵營内外ノ警戒ニ任スルモノナリ
- 二 風紀衛兵ハ兵營毎ニ之ヲ設ケ週番大尉ノ指揮ニ屬シ營内ノ取締ニ任シ營門出入ノ者ヲ監視スルヲ以テ任務トス

三 風紀衛兵ノ服裝ハ軍裝トシ雜囊、水筒、脊負袋、器具、手旗、飯盒、携帶天幕、毛布ヲ除クモノトス

四 風紀衛兵衛兵所ニ在ル間ハ銃及背囊ヲ順序正シク整頓シ置クヘシ敬禮ノ爲整列スルトキ及巡察ノ際ハ背囊ヲ負ハサルモノトス

五 風紀衛兵ハ書見スヘカラス又許可ナクシテ衛兵所ヲ離ルヘカラス
六 日夕點呼後ヨリ起床マテ風紀衛兵ノ三分ノ一衛兵所ニ於テ假眠ヲ許ス

七 外來人ニ對シテハ左ノ手續ニ依ルヘシ
准士官以上ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ名刺ヲ求メ若クハ氏名ヲ尋ネ

之ヲ該官ノ許ニ案内シ又ハ通報シテ其指圖ヲ待ツヘシ
下士以下ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ面會所ニ案内ノ後面會ヲ求ムヘ

キ者ノ隊號、官等級、氏名及本人ノ身分、氏名ヲ面會簿ニ記入セシメ

若ハ代筆シ聯、大隊本部附ハ其本人ニ中隊附ハ週番下士ニ通報スヘシ
面會ヲ求メラレタル者不在ナルトキハ成ルヘク其行先キ歸營時刻等ヲ
告ケ知ラスヘシ若シ入院中ノ者ニ面會ヲ求ムル者アルトキハ病院所在
地徑路等ヲ教ユヘシ
總テ外來人ニハ相當ノ禮意ヲ表シ言葉ヲ丁寧ニシ懇切且速ニ取扱フ
ヘシ

八 准士官以上及之ニ準スヘキ者並ニ其隨從者ノ外營外ニ物品ヲ持出
サントスル者アルトキハ其持出證ト物品トヲ照合スヘシ若シ持出證ナ
キ者又ハ證明外ノ物品ヲ携フル者アルトキハ之ヲ衛兵司令ニ引渡ス
ヘシ

第三章 諸當番從卒

當番卒ハ命令及書簡ノ送達其他雜役ニ使用セラル、モノトス
概ネ左ノ如シ

一 諸本部ノ當番 聯隊大隊中隊醫務室經理室委員室

二 集會所ノ當番 酒保、炊事、倉庫

一 當番ノ心得

○當番ハ誠意ヲ以テ勤務中ハ従事スヘシ

○當番ノ服務ハ特務曹長ノ割出ニ依リ週番下士ヨリ傳達セラル

○各本部ノ當番ハ公用外出ノ服裝ヲ以テ任地ニ到ルヘシ

○各當番交代ノ際ハ申送りテ確實ニシテ監視物品ニ就テ嚴重ニ申送り
ヲ爲スヘシ

○初年兵ハ第二期檢閲後ヨリ勤務ニ服スルモノトス

二 各本部集會所酒保ノ當番卒心得

此當番ハ傳令其ノ他ノ勤務ニ服スルモノトス

○當番控所ニテ雜談放歌等スヘカラス又上官監視ナキモ命セラレタ
ルコトハ著實ニ爲スヘシ

○當番ト呼ル、時ハ速力ニ返事ヲ爲シ然ル後ニ赴クヘシ

○口頭ノ命令報告ヲ傳フル時ハ發令者ニ對シ復唱スヘシ言語ハ明瞭ニ
動作ハ確實ニナスヘシ

○各中隊ニ同時ニ達スル事ヲ要スル時ハ遠キ中隊ヨリ傳達スヘシ

○物品ヲ送達スル時送達簿ニ捺印ヲ受クヘシ又ハ受領證ヲ取ル可シ

○外出公用ノ時ハ途中ニテ自己ノ用辨ヲ爲ス可ラス

三 炊事當番ノ心得

○炊事當番ノ勞役ハ頗ル多大ナル勤務ナレトモ戰友ヲ給養スル必要ナ
ル職務ナル故勞ヲ厭ス服務スヘシ

三 炊事當番ノ心得

○炊事當番ノ勞役ハ頗ル多大ナル勤務ナレトモ戰友ヲ給養スル必要ナ
ル職務ナル故勞ヲ厭ス服務スヘシ

○炊事當番ノ勞役ハ頗ル多大ナル勤務ナレトモ戰友ヲ給養スル必要ナ
ル職務ナル故勞ヲ厭ス服務スヘシ

- 調理ハ無責任ニ放任セス味良キモノヲ作ルヘシ
- 飯ハ焦飯又ハガンタ飯ナキ様ニ炊クヘシ然ラサレハ戦友カ迷惑ス
- 醬油薪炭水其他材料ノ節約ヲ計ルヘシ
- 火ノ元ニ注意シ又清潔ヲ旨トシ食器ノ清潔及破損セサルコトニ注意セヨ

四 倉庫當番ノ注意

- 倉庫内ニテ吟歌放談喫煙ヲ嚴禁スヘシ
- 被服ノ整頓ハ綿密ニ爲ス可シ成ルヘク蝶蟲及鼠族ヲ注意シテ捕フヘシ

五 從卒ノ心得

- 倉庫内ノ物品ヲ散亂又ハ他ニ搬出シ又整頓ノ時一重ノ員數ハ正確ニ規定ニ從フヘシ

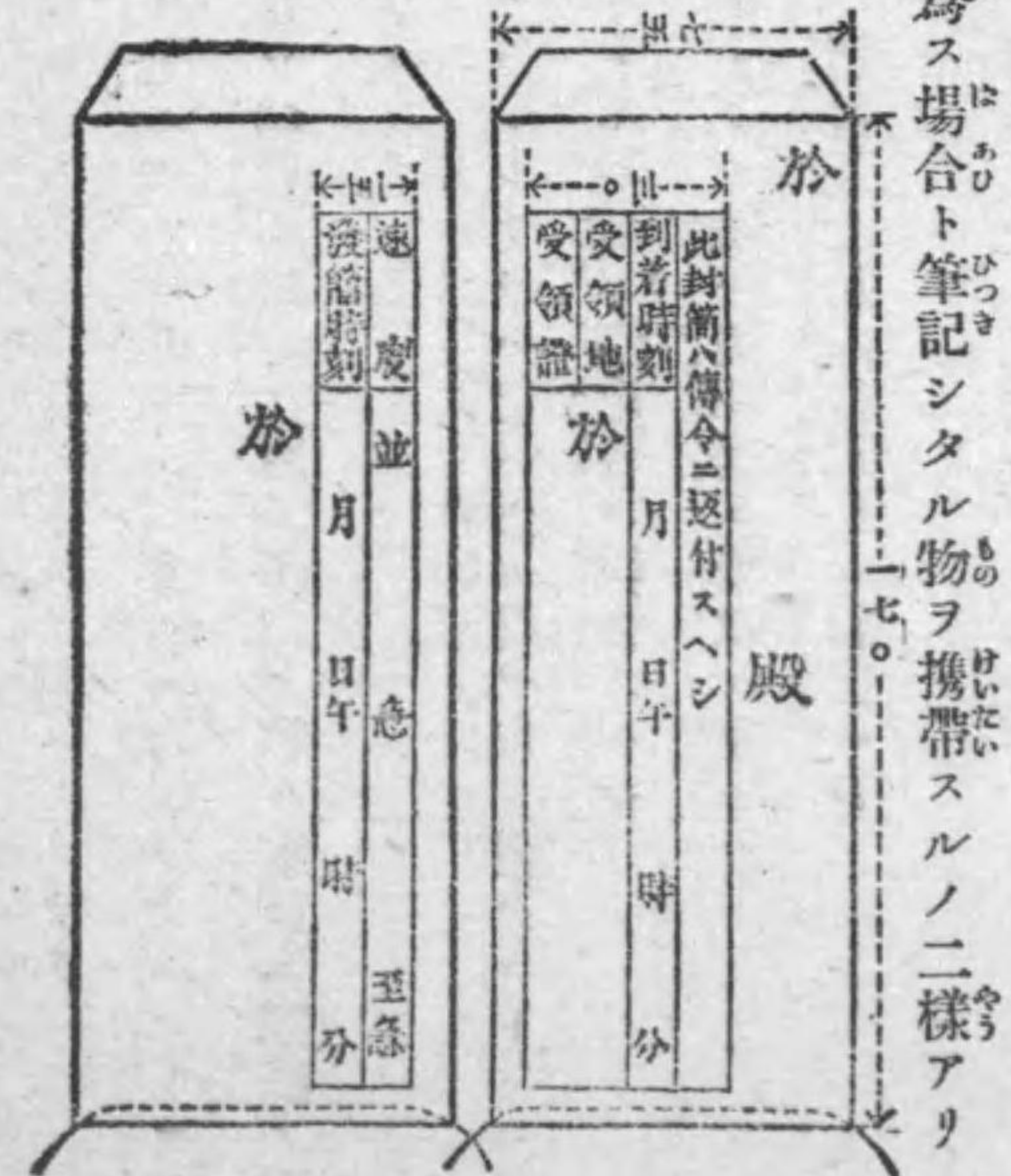
- 從卒ハ將校ノ傳令書翰使及被服武器ノ手入ヲ爲スモノナリ
- 從卒ハ家族ノ用向ヲナスモノニ非サルモ家族ハ尊敬ヲナスコトヲ要スルモ之ニ狎レヌ且ツ起居應接ニ注意シ隊内ノ事ヲ家族ニ家庭ノ事ヲ隊内ニ語ルヘカラス
- 將校ヨリ買物ヲ命セラレシナラハ必ス受取書ヲ取り置クコト
- 物品ヲ破損紛失アルトキハ直ニ使用者ニ報告スヘシ
- 用事ノ爲メ點呼後トナリシ時ハ證明書ヲ受取ル可シ
- 外出及歸營ノ際ハ週番下士及内務班長ニ届出ヘシ

第十八課 陣中要務ノ大要

第一章 傳令勤務

輜重兵須知

- 一 命令トハ上官ヨリ下ノ者ニ言ヒ付ケルヲ云フ
- 二 報告トハ上官ニ下ノ者カ申上ルコトヲ云フ
- 三 傳令使トハ命令報告ヲ傳達スル者ヲ云フ
- 四 口上ヲ以テ傳令ヲ爲ス場合ト筆記シタル物ヲ携帯スルノ二様アリ
- 五 口上ヲ以テ傳令ヲ爲ス場合ニハ出發前之ヲ復唱スル必要アリ
- 六 命令報告ヲ發スル者ハ傳令使ニ左ノコトヲ示ス物ナリ
- 一 宛名



輜重兵須知

- 二 何處ヲ通りテ何地ニ到ル可シ
- 三 何處ニ歸ル可シ
- 四 速度
- 七 若シ前ノ事ヲ示ササル時ハ良ク間テ然ル後出發スヘシ
- 八 傳令使ハ途中上官ニ遇フモ敬禮ヲ行ハス又其歩度ヲ變スルコトナシ
- 九 傳令使ノ速度ハ左ノ三種アリ
- 一〇 『並』 『急』 『至急』
- 並 徒歩傳令ノ速度ハ左ノ如シ
- 並 速歩一時間五千米
- 急 駈歩速歩半分ツツ一時間六千米
- 至急 出來得ル限り駈歩

第二章 行軍

一 行軍

軍隊カ甲地ヨリ乙地ニ移ル運動ヲ行軍ト云フ行軍ニハ旅次行軍ト戦備行軍ノ二種アリ

二 旅次行軍

敵ニ遠キ場合警戒隊ヲ出サズシテ行進スルヲ云フ

三 戦備行軍

敵ニ近キ場合前方又ハ後方ニ警戒隊ヲ出シテ行進スルヲ云フ

四 行軍ノ軍紀

行軍ニ於ケル兵卒ノ守ルヘキ規則ヲ云フ

第一節 行軍中ノ心得

一

情況障リナキ時ハ隊長ヨリ談話シ又ハ唱歌喫煙等ヲ許サルモ前後ノ距離ヲ伸スヘカラス是レ後方部隊ニ及ス影響大ナレハナリ

二

左右ニ間隔ヲ廣ケル可カラス是レ道路ノ一側ハ傳令往復ノ爲メニ供スルモノナレハナリ之ヲ閉塞スル時ハ命令報告ノ傳達ヲ遅延ナラシムルレハナリ

三

各人猥リニ服装ヲ亂スヘカラス又兵卒ハ無斷ニ列ヲ離ル可カラス軍橋ヲ渡ル時ハ列ヲ整へ歩ヲ揃フ可カラス又軍橋通過中前後ノ距離

四

延伸スルモ橋上ニテ駈歩ヲナシ距離ヲ閉ツヘカラス市街又ハ尊敬スヘキ人軍旗等ノ傍ヲ通過スル隊ハ途歩ト雖モ喫煙

五

談話ヲ中止スルヲ要ス

第二節 行軍間休憩中ノ注意

- 一 休憩中ニハ必ス小便ヲナシ行軍中ニ爲ササル事ヲ注意スヘシ
- 二 休憩時ヲ利用シ靴下ノ皺ヲ伸シ靴傷ヲ豫防スヘシ大休止ニ當テハ脱靴シ足ヲ冷ヘシ
- 三 休憩中道路ヲ立塞ケ傳令等ノ往復ヲ妨クヘカラス
- 四 休憩中ハ上官ニ敬禮ヲ爲スニ及ハス
- 五 許可ナク水ヲ飲ムヘカラス
- 六 寒中ニハ室内ニ入り急ニ暖ヲ取ル等ノ事アル可ラス
- 七 雪中ニ在テハ長ク耐止ス可ラス適當ニ身體ヲ活動スヘシ
- 八 休憩地ヨリ遠ク分散スヘカラス
- 九 休憩中ニ成ルヘク水筒ニ湯ヲ補充スヘシ

第二節 行軍舍營ノ注意

- 一 宿舎ニ就キタレハ諸物品ノ手入レヲ爲ス様殊ニ靴ニハ塗油ヲ爲スコト足ノ手入レヲ爲シ物品ヲ成ルヘク散亂セサル様整頓シ置クコト
- 二 手入其他ノ用ヲ確實ニ濟シ早く休憩ニ移ルコト

第四節 行軍出發前ノ注意

- 一 睡眠ヲ充分ニ爲シ置キ大酒大食ヲ避クルコト
- 二 襦袢袴下等ヲ清潔ニ爲シ置キ靴ノ破損ナキ様脚絆ヲ完全ニシ置ク事
- 三 武器被服ノ手入ヲ充分ニ爲シ置クコト
- 四 必要ヨリ早く起キル可カラス大抵ハ整列時一時間前ニ起床シ洗面食事武装ヲ爲シ少クモ五分前ニハ整列ノ場所ニアルヘシ忘レ物無キ様

注意スルコト

- 五 食事ハ必ス爲ス事若シ食慾進マス又遅刻ノ恐レヲ以テ食事ヲスルノ暇ナキ時ハ之レヲ携行シ途中ニテ時機ヲ得テ喫食スルヲ良トス
- 六 大小便ハ必ス整列前ニ之レヲ爲ス事

第三章 宿營

- 一 宿營
宿營トハ軍隊カ泊ル事ヲ云フ
- 二 宿營ニハ左ノ三種アリ
舍營 露營 村落露營
- 三 舍營トハ家ニ泊ルコトヲ云フ
- 四 露營トハ野ニ泊ルコトヲ云フ

六 營舎中の心得

- 五 村落露營トハ一部隊家ニ泊リ一部野ニ泊ルヲ云フ
- 一 舍營ニ就キタレハ直ニ武器ノ手入ヲ爲シ銃架ヲ作り整置スルコト
- 二 被服ノ手入ヲ爲シ整頓ノ位置ヲ定ムルコト
- 三 成ル可ク入浴シ身體ノ清潔ト疲勞ヲ慰スルコト
- 四 用事済ミ次第速カニ休憩ニ移ルコト然トモ應急ノ所置ヲ研究シ置クハシ
- 五 靜肅ニ舍營シ舎主ニ迷惑ヲ懸ケサルコト
- 六 宿舎長ノ命ニ從ヒ飲事ヲ爲スコト
- 七 又宿舎内ニ病人アル時ハ申出検査ヲ受クルコト
- 八 翌日ニ關スル命令(整列時間等)ヲ聞キテ後就眠スルコト
- 七 露營中兵卒ノ心得

- 一 露營ニ於テハ戰備嚴肅ナラサルヘカラス
- 二 各兵猥ニ露營地ヨリ散ス可カラス
- 三 大小便ニ規定ノ所ニ爲ス事
- 四 背囊ノ入組品ハ成ル可ク展開セサルヲ可トス
- 五 露營中ノ食事分配等ハ宜シク注意シ喧擾ナラサルヲ要ス
- 六 出發前消火スヘシ
- 七 露營中下士卒ハ設備及雜役ニ從事スル間ハ上官ニ對シテ敬禮ヲ行フコトナシ休憩中モ又同シ
- 八 非常呼集ノ時ハ下士卒ハ武器ヲ携ルコトナシ
- 九 永キ滞在ノ露營ニ在テハ散步ヲ許サルルコトアリ然ル時ハ歸營號音ニテ歸營スヘシ

第四章 警戒

軍隊敵ニ近ク行軍スル時又ハ敵ニ近ク宿營スル時ハ敵方ヲ警戒スル爲メ特別ノ部隊ヲ出スモノトス

第一節 行軍ノ警戒

戰備行軍ヲ爲ス時ニ敵方ニ出ス警戒隊ハ左ノ種類アリ

- 前方ニ出スヲ前衛ト云ヒ
- 側方ニ出スヲ側衛ト云ヒ
- 後方ニ出スヲ後衛ト云フ
- 一 前衛ノ區分
 - 前衛本隊及前兵前衛騎兵ニ區分シ前兵ヨリ尖兵尖兵ヨリ前方及側方ニ

斥候ヲ出ス時トシテハ前兵ヨリ尖兵中隊ヲ出ス

二 前衛ノ任務

敵ニ向ツテ前進スル時僅カナル障害物(敵及通路)ヲ除キ本隊ヲ安全ニ
行進セシムルモノナリ若シ敵ニ衝突セハ本隊ハ戦闘準備ノ時間ヲ得セ
シムルヲ任務トス

三 後衛ノ區分

後衛本隊後兵及後衛騎兵ヨリ成リ後兵ヨリ尖兵ヲ出シ警戒ス

四 後衛ハ退却ニ當リ本隊ヲ安全ニ退却セシムルヲ以テ任務トス

五 側衛ノ名稱

前進ニテモ退却ニテモ敵ニ面シテ右側ニアルヲ右側衛左側ニアルヲ左
側衛ト云フ

第四節 宿營中ノ警戒

軍隊宿營セル時ハ前哨ヲ備ヘ又直接ニ外衛兵ヲ設ケテ警戒ス
前哨ノ區別左ノ如シ

一 前哨本隊

二 前哨中隊

三 小哨

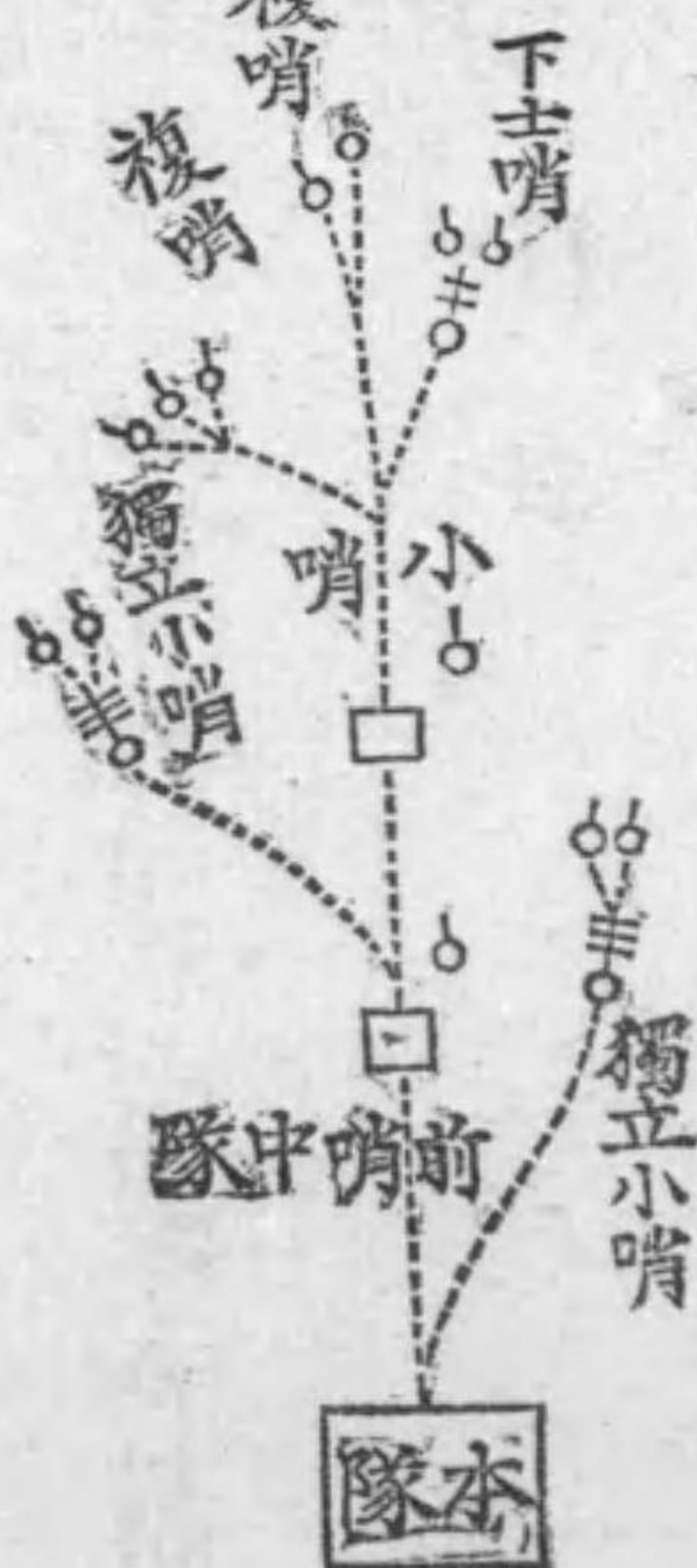
四 下士哨又ハ復哨

(復哨ハ二人ヨリ
四人迄)

一 前哨中隊

前哨中隊ハ固有ノ番號ヲ用ユ例ヘハ前哨第何中隊

前哨中隊ハ敵襲ニ當リ歩哨小哨等ヲ救ヒ前哨本隊ニ準備ヲ爲サシムル
任務アリ



二 小哨

小哨ハ前哨中隊ノ前方ニアリ復哨及下士哨ヲ配置シ敵ニ近ク警戒スルモノナリ

小哨長ハ士官ニシテ時トシテハ准士官下士ナルコトアリ
復哨ハ二人哨三人哨四人哨ナルモアリ

一ノ小哨ハ右翼ヨリ下士哨復哨ヲ通シ第二下士哨第二復哨第三下士哨ト番號ヲ附ス

第五章 行李

行李トハ戦闘及宿營ニ關スル材料ヲ云フ

行李ハ駄馬又ハ車輛ニ依リ運搬ス

大行李ト小行李ト二種アリ

大行李ハ宿營間ノ必要ノモス將校行李炊具糧秣等
小行李ハ戦闘間ニ要スルモノ器具彈藥衛生材料ヲ云フ

第六章 給養

一 戦地ニテ人馬ノ給養(食料)ノコトハ左ノ方法ニ依ル

一 軍隊ノ携行スル糧秣ヲ用ユ

二 倉庫ニ糧秣ヲ用ユ(野戰倉庫ニ在ル糧食ヲ以テ給養ス)

三 徵發ノ糧秣ヲ用ユ(或地方ニテ金錢ヲ支給シ物品ヲ取上ケ之ヲ給ス)

給ス)

四 舍主ノ供給(宿營シタル舍主ニ金錢ヲ支給シ賄ヲ爲サシム)

二 軍隊ノ携行スル糧秣

軍隊ニ携行スル糧秣トハ

各自一携帶スル糧秣
 大行李及縦列ニ積載スル糧秣ヲ稱ス
 各自ハ屯營ヲ出發スル時ニ背囊ニ入組ム携帶口糧二日分ヲ有ス
 精米一日分(六合)乾麵麩一日分(一八〇匁)及副食物(罐詰肉四〇匁食鹽六匁)
 携帶口糧ハ命令アルニ非サレハ之ヲ使用スルコトヲ得ス
 牛肉罐詰一個ハ一食分故ニ一食ノ時三人ニテ一組ヲ食スル方便ナリ

第七章 演習ノ注意

一 演習ノ旗標
 損傷旗
 射撃ノ効力ニ依リ損害ヲ受ケタル事ヲ示ス各中隊ニ一本ヲ具フ

假設旗、假設ノ敵又ハ假設ノ味方ヲ示スニ用ヒ
 赤一本 歩兵一中隊 濃黄一本 砲兵一中隊 濃黄、藍、一本重砲トス
 白一本 騎兵一中隊 赤白一本 機關銃一隊
 目標旗 砲兵カ射撃スル目標ヲ指示スルニ使用シ歩兵ヲ射撃シツツアルヲ示スニハ赤色ノ旗ヲ用ユ
 統監旗 演習ヲ統裁スル司令官ノ位置ヲ示ス旗ニテ騎兵卒之ヲ保持ス

二 號音

「將校集」將校演習ノ講評ノ爲メ統監ノ許ニ集マル
 「氣ヲ著ケ止」演習中止ノ號音ニテ散兵及一斤候ト雖モ其位置ニ止マ
 「休メ」氣ヲ著ケ止」ノ後此號音アレハ其儘ニ附近ノ者ト又銃シ休憩ス

「氣ヲ著ケ前へ」演習再興ニテ再ヒ對敵動作ニ移ル
「解レ」演習ノ終局ヲ示スモノニシテ對敵ヲ中止シ各隊宿營ニ就ク

三 徽章

中立者

黄色布

陪觀將校及之ニ屬スルモノ 赤色布

右ヲ標示スル爲メ各人ノ左ノ上膊ニ纏アルモノトス

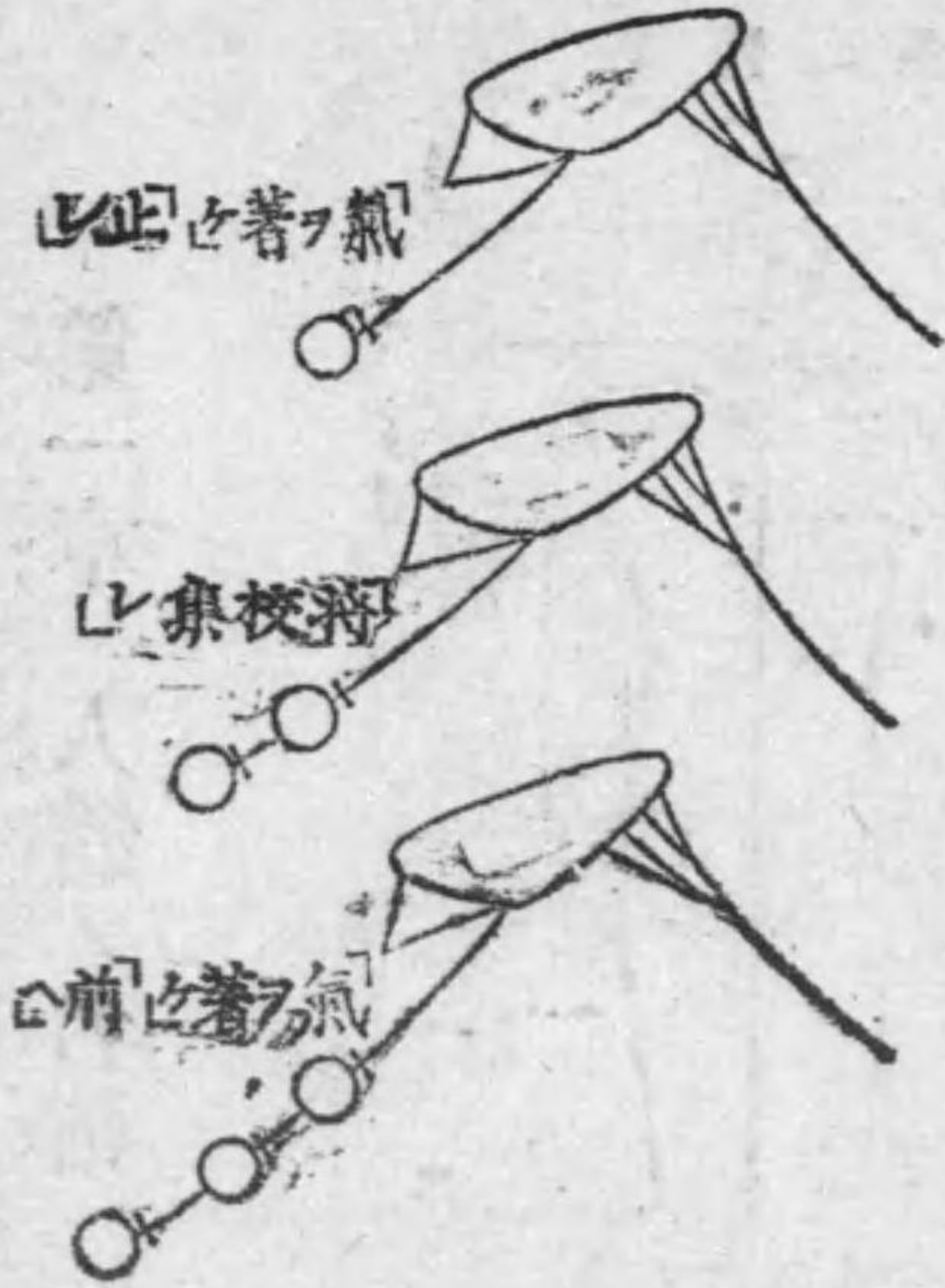
四 氣球

號音ニ代ルニ氣球ノ尾ニ赤キ玉又ハ圓錐筒ヲ附シテ統監ノ命令ヲ傳フ
(火災ヲ豫防)

村落特ニ秣藁等ノ火災ノ恐アル物ノ附近ニ於テ發火ヲ禁ス要スレニ前方ニ出テ射撃ス輕氣球ノ近傍ニテハ發火喫煙ヲ禁ス
(耕作物被害豫防)

畑地及園庭ハ務メテ入ルヲ避ケ止ムヲ得サレハ耕作物ヲ踏マサル如ク
注意スヘシ

號信ル依ニ球氣



赤球一ニ赤色圓錐筒一ハ休憩、兩軍指揮官集合ハ赤球二箇ニ赤色圓錐筒一箇、解散ハ赤球三箇ニ赤色圓錐筒一箇

鐵道線路ハ單獨者ト雖モ踏切ノ外通過スヘカラス

シテ至大ノ行軍力ヲ有スルハ輜重兵必須ノ要件ナリ蓋シ輜重兵ハ季節
天候及地形ノ如何ヲ論セス晝夜行動ヲ繼續シ輸送ニ從事スルヲ以テ勤
務ノ常態トスルノミナラス往々砲煙彈雨ノ間ニ出入ズルコトアルヲ以
テ以上ノ要件ヲ具有アルニアラサレハ其任務ノ達成得テ期スヘカラス
五、馬ハ輜重兵ノ活兵器ナリ輜重兵ノ本領ヲ發揮シ得ルト否トハ一ニ此
兵器ノ利鈍如何ニ同ル故ニ其馭法ニ熟スルト共ニ調教ヲ進メ常ニ極力
愛護シ以テ其活動力ヲ充實セシムルヲ要ス

第三章 輓馬各種地形ノ行進

一、車輛ハ通常路幅約一米七十三六式二輪輜重車ニ以上傾斜約六分一以下ノ
道路ヲ行進シ得ルモノトス
行進間遭遇スル地形ノ障礙ハ爲シ得ル限り豫備卒ヲ使用シテ之ニ所要

ノ工事ヲ施シ以テ行進ニ支障ナカラシムヘシ
車輛ノ破損ハ微細ノモノト雖直ニ其効力ニ關係ス故ニ速ニ應急修
理ヲ加ヘ決シテ之ヲ等閑ニ附スヘカラス
二、行進間兵卒ハ駄馬ノ要領ニ從フノ外車輛ノ狀態ニ注意シ穀内ニ於ケ
ル脂油ノ缺乏又ハ螺桿木部ノ弛ミ等ニ依ル音響ヲ耳ニシ或ハ車輛ノ轉
動ニ異狀アルヲ認ムルトキハ所要ノ處置ヲ爲スヲ要ス
三、休止毎ニ兵卒ハ駄馬ノ要領ニ從フノ外左ノ要件ヲ遵守スヘシ
馭卒ハ直ニ支桿ヲ立テ豫備卒ハ木又ハ石等ヲ以テ確實ニ車輛ニ輪止ヲ
施スコト
車輛ヲ檢査スルニ方リ若穀内ニ脂油缺乏シ又ハ軸轄等ニ異狀ノ疑ア
ルトキハ直ニ所要ノ處置ヲ爲スコト
四、馬ノ發進困難ナルカ又ハ行進中大ナル輓力ヲ要スル地點アルトキハ

豫備卒ハ車輛ヲ押シテ輓曳ヲ援ケ馭卒ハ音聲ヲ以テ馬ヲ激勵スルヲ要ス此際要スレハ鞭ヲ使用スヘシ

通過困難ナルカ若ハ危険ナル地點ニ在リテハ小隊長ハ豫メ豫備卒ヲ適當ニ配置シ其通過ヲ援助セシムヘシ

五、傾斜急ニシテ長キ坂路ヲ登ルニハ成ルヘク車輛ノ重心ヲ前方ニ在ラシムル爲豫メ輾木受金ノ位置ヲ下クル等所要ノ處置ヲ爲シ輓曳ヲ要易ナラシムヘシ

坂路ノ通過中馬ノ呼吸ヲ繼カシムル爲一時停止スルトキハ速ニ輪止ヲ施シ車輛ノ轉動ヲ防クヘシ路幅之ヲ許セハ車輛ヲ稍々側方ニ向クルヲ可トス又登坂路ニ於テハ行進ヲ起スニ方リ僅ニ斜行セシムルヲ便トス

急ナル坂路ヲ降ルトキハ危険ヲ避クル爲要スレハ車輛ノ轉動ヲ制限ス

ルノ處置ヲ講セサルヘカラス坂路ノ通過ニ於テ事故ノ生スルハ之ヲ降ル際ニ多キヲ以テ注意ヲ加フヘシ

六、通過困難ナル地形ニ在リテ一車止ルトキハ後續車ニ危険ヲ及ボスヲ以テ間斷ナク行進ヲ繼續スヘシト雖幹部ハ馬ノ状態ヲ顧慮シ要スレハ少時間ノ停止ヲ行ハシムルモノトス否サレハ馬ヲシテ疲勞ノ結果避クヘカラサル各個ノ停止ヲ爲スニ至ラシムヘシ

七、通過危険ナル地形ニ在リテハ馬ノ沈靜ヲ圖リ不慮ノ危害ヲ避クル爲行進歩度ヲ短縮スルヲ要ス

急ナル小起伏又ハ路面ノ凹所等大ナル輓力ヲ要スル地點ハ却テ速度ヲ伸ハシ氣勢ヲ附シ一氣ニ之ヲ通過スルヲ可トスルコトアリ

八、積雪地ニ在リテハ通常車輛ノ三分一ヲ没スルニ至レハ行進ヲ連續スルコト困難ナリトス而シテ積雪地、砂地及泥濘地ノ行進ニ在リテハ兵

卒ノ歩度馬ニ伴ハスシテ其輓曳ヲ妨クルニ至ルコトアルヲ以テ行進速
度ニ注意セサルヘカラス

積雪地及砂地ニ在リテハ先行車ノ轍痕ヲ經テ通過スルヲ可トス

九、泥濘ノ道路ヲ通過スルトキ泥土淺キモノニ在リテハ各車同一ノ轍痕
ヲ取ルヘシト 雖深キモノニ在リテハ後續車ハ成ルヘク先行車ノ轍痕
ヲ避クルヲ可トス

十、凹凸不齊ノ道路ニ在リテハ馬ノ躓クヲ防キ且車輛ヲ顛覆セシメサル
コトニ注意スヘシ

道路上ニ在ル石、穴等ハ之ヲ避ケテ通過スヘシト 雖已ムヲ得サルト
キハ之ヲ兩輪間ニ取ル如ク馬ヲ導クヘシ又深キ轍痕ニ在リテモ以上ノ
如ク馬ヲ導クヲ可トスルコトアリ

十一、狭キ道路ニ在リテハ手綱ヲ伸ハスコトナク馬ヲ沈著セシメ其歩度

ヲ縮メ車輛ノ路外ニ脱セサルニ注意シテ導クヘシ

辛ウシテ車輛ノ通過シ得ヘキ道路ニ在リテハ馬ノ前ニ立テ後退シツツ
導クヲ要ス

狭キ道路ノ屈曲部ヲ通過スルトサハ其外側ニ沿ヒテ行進セシムル如ク
馬ヲ導クヘシ路幅極メテ狭ク屈曲部直角或ハ銳角ナルトキハ其場左
(右)向ヲ行フヲ可トス

十一、狭キ道路ニ於テ後向行進ヲ要スルトキハ通常其場後向ヲ行フト雖
路幅之ヲ許ササルトキハ脱駕後向ヲ行フヘシ

脱駕後向ヲ行フトギハ豫備卒ヲ豫備輓馬ノ位置ニ集メ之ヲ二若ハ三名
ヨリ成ル若干組ニ分ツ 馭卒ハ繫駕ヲ解キ輓木受金ノミヲ以テ車輛ヲ支
ヘ豫備馬ヲ保ツ者ハ其馬ヲシテ後向ヲ爲サシム而シテ各組ノ豫備卒ハ
指定ノ車輛ニ就キ兩側同時ニ輓木受金ヲ脱シテ輓木ヲ高メ通常車輛ヲ

左ニ廻ハシテ直後ニ在リシ輓馬ノ輓木受金ニ輓木ヲ嵌メ該輓馬ヲ保ツ所ノ馭卒ハ直ニ繫駕ス逐次此ノ如グシテ後尾ヨリ始メ先頭車輛ニ及ホスモノトス而シテ先頭車輛ニ繫駕シアリシ輓馬ヲ豫備馬ト爲ス

十三、難路ニ於テ繫駕車輛ニ他ノ馬ヲ副駕シテ行進スルコトアリ而シテ輓馬ヲ副駕スルトキハ其輓鎖ニ適宜ノ綱ヲ繼キ綱ノ長サヲ約一米五トシ其後端ヲ後馬ノ輓鉤ニ懸ク若乗馬ヲ副駕スル時ハ引繩ヲ直ニ後馬ノ輓鉤ニ懸クヘシ而シテ行進ニ方リテハ前後馬ノ力ヲ一致セシムルニ注意シ各馬平均ニ輓曳セシムルコト肝要ナリ又坂路ノ屈曲部ニ於テハ兩馬ノ協力シ能ハザルコトアリ然ルトキハ主トシテ後馬ヲシテ輓曳セシムルヲ要ス難路ノ種類ニ依リ若小隊ノ各車輛悉ク副駕スルヲ要スルトキハ適當ニ之ヲ區分シ逐次ニ通過スルモノトス

十四、難路ノ状態ニ依リ副駕ヲ行フモ尙通過ヲ許ササルトキハ積載量ヲ

減ジ又ハ容積小ナル積載品ハ輓鞍重輓馬具ニ駄載スルコトアリ

森 林

十五、森林ノ通過ハ駄馬ノ要領ニ從フ

橋 梁

十六、橋梁ノ通過モ在リテハ橋床及橋脚ノ堅固ナルヤ否ヤニ深ク注意スヘシ若橋梁ノ構造堅固ナラサルトキハ脱駕シテ車輛ト馬トヲ各別ニ通過セシムルヲ要スルコトアリ

渡 船

十七、渡船ハ左ニ掲クルモノノ外駄馬要領ニ從フ

渡船ニハ通常車輛ト之ニ屬スル馬トヲ一船ニ搭載スルモノトス之カ爲ニハ先ヅ脱駕シ第一ニ車輛第二ニ馬ヲ搭載スヘシ若一船ニ二車輛以上ヲ搭載スルトキハ通常馬ト車輛トヲ交互ニ位置セシメ又門橋ニ在リ

ヲハ馬ト車輛トヲ各別ノ船ニ搭載スルヲ可トスルコトアリ

第二十課 射撃ニ關スル學科

第一章 總論

- 一 彈道 彈道トハ彈丸ノ通過スル彎曲シタル線路ヲ云フ
石ヲ前方ニ抛ツ時ハ弓形ヲ爲シ前方ニ落ツ之ヲ彈道ト云フ
- 二 照星ト照尺トヲ照準器ト云フ
照門ヨリ照星ヲ見出シタルヲ照準線ト云フ
照準點トハ照準線ノ達シタル點ヲ云フ
目標ニ照準點ヲ導クヲ照準ト云フ
- 三 照準ノ關係

- (一) 照門ヨリ照星ヲ見出シ方ニ依リ彈著ハ種々ニ變化ス
 - ① 高く見出シタルトキハ彈著上ル
 - ② 低ク見出シタルトキハ彈著下ル
 - ③ 右ニ偏シテ見出ス時ハ彈著右トナル
 - ④ 左ニ偏シテ見出ス時ハ彈著左トナル
- 四 銃身ヲ傾キテ照準スル時ノ彈著如何
 - 銃身ヲ右ニ傾テ照準シタル時ハ彈著ハ右下トス其理由ハ銃身ヲ右ニ傾ケハ銃口ハ照準シタル方向ニ向ハスシテ右ニ向ヒ其上ルハ正シタル照尺ヨリ實際ハ低クナルヲ以テナリ
 - 銃ヲ左ニ傾ケタルトキノ彈著ハ左下トス其理由ハ前ト反對ナリ
- 五 風ハ彈著ニ如何ナル關係ヲ及スカ
 - 風前ヨリ吹ク時ハ彈丸ハ上ニ著ク風後ヨリ吹ク時ハ彈丸ハ下ニ著ク

風右ヨリ吹ク時ハ彈ハ左ニ著ス風左ヨリ吹ク時ハ彈ハ右ニ著ス

六 光線ハ彈著ニ如何ニ感及スルヤ

太陽カ前又ハ後ヨリ照星ヲ照ス時ハ自然照星ヲ照スニヨリ

自然照星ヲ低ク見出ス

太陽右ヨリ照星ヲ照ス時ハ左ニ著クモノナリ

太陽左ヨリ照星ヲ照ス時ハ右ニ著クモノナリ

七 氣候及雨雪ハ彈著ニ如何ナル感及ラスルヤ

炎熱ノトキハ彈著上ル寒氣ノ時ハ彈著下ル雨雪ノ時彈著下ル

八 距離測量

一 距離測量ハ極メテ緊要ナルモノニシテ銃器精良ナル程益々精密ナ

ラサルヘカラス何トナレハ彈丸ハ自己ノ取リタル照尺ト同一ノ距離

ニ落下スルヲ以テナリ故ニ熟練スルコトヲ常ニ心懸ケサルヘカラス

二 簡單ナル距離測量法ニ三種アリ歩測、目測、音響測量トス

三 歩測ハ歩數ニテ測ル(歩數ハ復歩ヲ用ユルヲ良トス復歩トハ二歩)

モノニシテ最モ確實ナル測量法ナリト雖之ヲ用フル場合少シ

四 歩測ハ百米突ニ應スル歩數ヲ得ル毎ニ一指ヲ屈シ而シテ最後ノ百

米突ニ滿タサル距離ハ其歩足數ヲ米突ニ直シ前ニ測リタル百米突ニ

加フヘシ

五 目測ハ最モ誤リ易キ測量法ナリト雖之ヲ用フル場合多ク又最モ

緊要ナル測量法ナリ故ニ目測ニ熟達セサレハ如何ニ良好ナル射手ト

雖戰場ニ於テ其効力ヲ充分ニ顯ハスコト能ハサルナリサレハ平素

ヨリ此點ニ心懸ケ營内及練兵場ニテ常ニ目撃シ得ル地點迄ノ距離

ヲ記憶シ生地ニ至テハ之ヲ考ヘ出シテ比較スルヲ可トス

六 目測ハ概ネ左ノ方法ニヨルモノトス

知 須 兵 重 輜

二五八

- 一、數回ノ演習ニ依リ記憶シタル地上ノ距離或ハ豫メ知ル所ノ目前ノ某距離ヲ新ニ測量スル距離ニ比較シテ測定スルカ或ハ測量スル距離ノ中央ニ一點ヲ定メ此點マテノ距離ヲ目測シ之ヲ倍シテ距離ヲ定ムルモノトス中間平坦ナル時ニ限ル
- 二、一定ノ距離ニ在ル目標カ能ク見ルカ朦朧ナルカ又大キク見ルカ小ナルカヲ記憶シ居リテ新タニ測量スヘキ距離ニ在ル目標及其近傍ノ見ヘ方ニ比較シテ距離ヲ考フルモノトス中間ニ谷等ノ有ル場合ナリ
- 七 目測誤差ノ感及スル場合概ネ左ノ如シ
目測ヲ近ク誤リ易キ場合
- 一 太陽ヲ背ニスルトキ
- 二 天氣晴朗ナルトキ

知 須 兵 重 輜

- 三 目標ノ背後明瞭ナルトキ
- 四 中間ノ土地ヲ通視シ得サルトキ
- 五 平坦地、水面、遠隔セル明瞭物體
- 六 波狀地
- 七 敵兵身體ノ大部ヲ現ハストキ
目測ヲ遠ク誤リ易キ場合
- 一 炎暑及太陽ニ面スルトキ
- 二 曇天ノトキ
- 三 森林内及狹長ナル土地
- 四 目標ノ背後暗黒ナルトキ
- 五 濃霧、曉方、暮方
- 六 一部ノミ見ユル敵兵

二五九

八 軍隊ニテ用ユル距離

- 一 密理米突 三厘三毛 (同)一米ノ千分ノ一
- 一 珊瑚米突 三分三厘 (同)一米ノ百分ノ一
- 一 挫止米突 三寸三分 (同)一米ノ十分ノ一
- 一米突 三尺三寸 (曲尺)
- 一 吉羅米突 三百三十尺 (同)千米突
- 一 里ハ大凡四吉羅米突ナリ

第二章 基本射撃

- 一 基本射撃トハ實包ヲ以テ銃器ノ用法ニ慣熟セシメ戰鬪射撃ヲナシ得ルニ至ル様已知距離ニ至ル射撃ヲ云フ分テ豫習及實習ノ二種トス
- 二 射手ノ等級
 - 一 初年兵及未熟ナル射手
 - 二等射手
 - 一等射手
 - 二 二等射手ノ各習會ニ合格シタルモノ
 - 一等射手
 - 二等射手
 - 三 第二種徽章ヲ有セル者及二ケ年間一等射手ノ各習會ニ合格シタルモノ
 - 特別射手

第三章 戰鬪射撃

一 應用射撃

- 應用射撃ハ實包ヲ使用シ單獨ノ兵ノ動作ニシテ左ノ如ク施行ス
- 第一 目標發見
- 第二 地物ノ撰定地物ノ利用
- 第三 目標ヲ適當ニ選定スルコト
- 第四 距離目測ヲ爲ス

- 第五 射撃シテ効力アルヤ否ヲ判定ス是カタメニハ(次節ノ効力判断)ヲ考ヘサルヘカラス
- 第六 照尺及照準點ヲ選定或ハ之ヲ修正スルコト
- 第七 如何ナル姿勢ニ於テモ据銃ヲ敏捷ニスルコト
- 第八 短少時間ニ精密照準ヲ爲スコト
- 第九 精神ヲ沈著シ熟慮シテ發射スルコト

第廿一課 馬事ニ關スル學科

第一章 馬體ノ名稱馬匹ノ毛色

一 毛色ハ馬ノ血統、產地等ニ因リ種々相異ナリト雖モ敢テ馬ノ能力ニ

關係ナシ鹿毛、栗毛、青毛、河原毛、槽毛、蘆毛、月毛、駁毛アリ

二 鹿毛 被毛濃褐色或ハ淡褐色ヲ呈シ鬣及四肢ノ下半部ハ黑色又ハ帶黑色ニシテ其ノ被毛帶白色ナルヲ白鹿毛帶紅色ナルヲ紅鹿毛帶金色ナルヲ金鹿毛帶黑色ナルヲ黒鹿毛ト稱シ普通黒鹿毛ノ外ハ總テ鹿毛ト稱ス

三 栗毛 全體濃赤色又ハ淡赤色ニシテ其ノ帶白色ナルヲ白栗毛帶紅色ナルヲ紅栗毛帶黑色ナルヲ柄栗毛鬣、尾ノ白色ナルヲ尾花栗毛ト稱シ普通柄栗毛、尾花栗毛ノ外ハ總テ栗毛ト稱ス

四 青毛 全體純黒ナルモノアリ夏季ハ黑色ニシテ冬季ハ帶赤色又ハ帶褐色ナルモノアリ其ノ青色ヲ帶フルモノヲ水青毛ト稱シ普通總テ青毛ト稱ス

五 河原毛 被毛灰白色或ハ帶黃褐色ヲ呈シ鬣、尾及四肢ノ下半部

ハ黒色又ハ帶黒色ナリ

六 糟毛 全身ノ地毛ニ白毛ヲ散生スルモノニシテ鬣、尾及四肢ノ下半部等ハ概ネ黒色或ハ帶黒色ナリ地毛鹿毛ナルトキハ糟鹿毛栗毛ナルトキハ糟栗毛ト稱ス

七 蘆毛 白色ト黒色或ハ濃色毛 赤、黄、トノ全身混生ニシテ皮膚及ヒ蹄ハ色素ヲ有シ老齡ニ至ルニ從ヒ漸次白毛ニ變ス

八 月毛 全體ノ被毛赤黄色ヲ帶ヘル白色ニシテ尙純白色ノ馬モ亦此ノ中ニ含有セシム

九 駁毛 全體各部ニ大小不同ノ白毛斑ヲ散在セルモノヲ云フ著シク馬品ヲ損シ且目ニ映シ易シ

一〇 別徴ハ馬ノ識別上必要ナルモノニシテ其ノ記載例左ノ如シ
○ 額刺毛 額ニ生シタル少數ノ白毛ヲ云フ

○ 星 額ニ在ル白斑ニシテ其ノ著シク小ナルモノヲ小星ト云フ

○ 流星 星ノ長ク下方ニ延ヒタルモノヲ云フ

○ 鼻白 鼻端ニ存スル白斑ヲ云フ

○ 白 肢ノ下端ニ在ル白斑ニシテ其ノ稱呼左ノ如シ但シ白ノ完カラサルモノヲ半白ト云フ

左前一白、前二白、左二白、左前右後二白、左後一白、後二白、前

右後三白、後左前三白、四白

○ 異毛 先天的又ハ創傷ニ依リ局部ニ生シタル異色毛ヲ云フ

○ 岩陷 筋肉ノ一部窪ミテ皮上ニ陷凹ヲ呈スルモノヲ云フ

○ 烙印 頸、軀、肢等ノ一部ニ烙印アルモノハ部位ト烙印ノ原形ヲ併稱スルモノトス

第二章 飼養品

- 一 馬量ノ良否ハ馬ニ影響スルコト最大ナルヲ以テ之カ選擇ニハ特ニ注意スルヲ要ス
- 二 馬糧ヲ分チテ常用、代用ノ二種トシ常用ハ大麥、燕麥、秣、藁ニシテ代用ハ其ノ他ノ穀類、藪、生草、稗類等ナリ
- 三 軍馬ニ給スル馬糧ノ一日分ヲ稱シテ日量ト云フ日量ハ馬ノ作業、馬種、年齢、體格、消化力其ノ他季節、天候等ニ依リ一定ナラス
- 四 平時ノ規定左ノ如シ

種馬区分	馬		糧	増	飼
	大	一			
大	頭	一	日	ノ	額
麥					
秣					
藁					
大					
麥					

第三章 飼與

第一節 馬糧及藁

第一種馬	一貫四百匁		
第二種馬	一貫三百匁	一貫	匁
第三種馬	一貫百匁	一貫	匁
第四種馬	一貫	匁	三百五十匁以内

- 一 馬ノ胃ハ體軀ニ比較シテ甚小ナルカ故ニ一時ニ多量ノ飼料ヲ容ルルニ堪エス其ノ日量ハ之ヲ數回ニ分配シテ飼付ヲ爲シ緩徐ニ食セシムルヲ必要トス然レトモ作業上ト關係ヲ顧慮シ確實ニ實施シ得ラルル程度ニ於テ飼付ノ回數ヲ定ムルヲ要ス
- 二 穀類ノ飼付回數ハ一日三回若ハ四回ヲ適當トシ比較的夕飼ヲ多ク

スルヲ可トス一日二回以下若ハ五回以上ノ飼付ハ共ニ避クヘキモノトス然レトモ單ニ榮養改善等ノ目的ヲ有スレハ回数ヲ多クスルコトアリ

三 秣ハ通常穀類飼付ノ中間ニ於テ一日三回以上ニ分與スルヲ可トス藜架上ニ秣ノ存スルハ馬ノ徒然ヨリ起ル齧癖、熊癖等ヲ豫防スルノ效アルヲ以テ決シテ之ヲ捨ツルコトナキニ注意スルヲ要ス

四 増飼ハ行軍演習等連續劇働ヲ爲サシムル場合ニ給スルモノナリ然レトモ其ノ前後ニ於テモ若干日間適當ニ増飼ヲ爲スコト亦必要ナリ

五 飼付ニ關シ特ニ注意スヘキ件左ノ如シ

○飼付ハ各馬同時ニ之ヲ行ヒ馬ノ騷擾ヲ豫防スルコト

○馬量ノ取扱ヘ丁寧ニシ水濕、不潔及減耗等ナカラシムルコト

○飼槽ハ飼付前綿密ニ掃除スルコト練飼ヲ給スル場合ニ在リテハ殊ニ然リ

○馬ノ採食中ハ成ルヘク靜肅ニシテ咀嚼ヲ全カラシムルヲ要ス故ニ採食中手入ヲ行フカ如キハ止ムヲ得サル場合ノ外ハ之ヲ避クルコト

○穀類採食中飼料ヲ飼槽外ニ散亂スル癖アル馬ニ對シテハ適當ノ設備ヲ爲シテ之ヲ防クコト

○大麥其ノ他消化困難ナル穀類ニハ略同容積ノ切藁ヲ混スルコト

六 寢藁トシテ最適當ナルハ藁ナリ保温良ク蹄ノ爲ニ粉碎セラレス且尿ノ吸呼力ニ富ム然レトモ結塊シ易キノ害アルヲ以テ敷方ニ注意スヘシ

七 寢藁ハ夕ニ於テ一回ニ分配シ逐次新陳交換ヲ行フヲ常トス元來寢藁ハ馬ヲ安息セシメ其ノ體力ヲ快復セシムルノミナラス馬體ノ保温並ニ擦傷及ビ汚染ノ豫防等保育上其ノ效大ナルモノナレハ常ニ多量ナルヲ可トス即チ糞尿等ノ爲汚レタルモノモ直ニ棄ツルコトナク能ク乾燥シテ使用スルヲ要ス

八 敷詰藁ハ最モ保温ニ適シ且馬ノ作業後直ニ休臥スルニ便ナルヲ以テ新馬竝ニ冬季殊ニ寒地ニ於ケル馬ノ保育上最モ有利ナリ然レトモ注意シテ整理セサレハ藁ノ腐敗ノ爲厩内ノ空氣ヲ變敗セシムルノ害アリ

九 寢藁ノ敷方ハ能ク振ヒ馬房ノ全面ニ平等ニ敷キ前掻ヲ爲ス馬ニ對シテハ前方ニ多クスルヲ可トス

第一節 飲 水

一 動物體ノ約十分ノ七八水分ニテ各組織一トシテ水ヲ含有セサルハナシ故ニ若一定ノ飲水量ヲ缺クトキハ諸種ノ危害ヲ醸シ重病ヲ發スルニ至ル

二 水ノ性質 水ノ温度ハ攝氏ノ十三度乃至十五度内外ヲ可トス、水ハ透明ニシテ濁ラサルヲ要ス歸置ノ後沈渣ヲ生スルハ他物ヲ混スルノ徴

ナリ而シテ水ハ無臭ナルヘシ臭氣ヲ檢スルニハ水ヲ壘内ニ封容シ約五十度ノ温度ヲ以テ之ヲ温メ然ル後嗅ケハ直ニ判別シ得ラル

三 水飼ハ通常飼付前ニ於テ之ヲ行ヒ夏季及ビ行軍演習等馬ノ發汗多キトキハ屢々給スルヲ可トス、飲水量ハ各馬ノ欲スルニ任セ決シテ制限スヘカラス日常ノ所要量ハ季節、天候、作業、飼料等ニ依リ差異アリト雖モ内國種ハ約八升乃至一斗六升ヲ普通トシ洋種ハ比較的少量ヲ要ス

四 劇働ノ直後ニ於テ飽飲セシムヘカラス又過冷ナル水ヲ給スヘカラス是消化器病、蹄病等ヲ發スルノ虞アルニ依ル故ニ若干分時ノ後呼吸ノ鎮靜スルヲ俟チテ水飼スヘシ若渴甚シキトキハ先ツ口ヲ洗ヒ水中ニ乾草及穀等ヲ浮ヘテ放飲ヲ防クヘシ

第四章 馬ノ取扱

第一節 一般ノ取扱

馬ハ温順伶俐ニシテ人ニ馴レ易ク能ク使役ニ服スト雖モ恐怖心強クシテ音響及物體ニ驚キ易ク且粗暴ノ取扱ニ對シテハ反抗心ヲ起シ易キヲ以テ其ノ取扱ハ親切温和ナルヲ要ス

一 馬ニ接近スル法 新馬ニ接近スルニハ通常前方ヨリ穩カナル音聲ヲ發シツツ遲疑セス其ノ肩ニ近ツキ掌ニテ輕ク頸及背ヲ撫テ之ヲ慰ムヘシ馬若疑懼セハ之ヲ沈靜セシメ其ノ嫌ハタル部分ヨリ撫ツヘシ此ノ際若人ヲ避ケ或ハ蹴リ或ハ咬マントスルトキハ馬ノ眼ヲ嚴格ニ凝視シ音聲ニテ威シ其ノ沈靜スルヲ俟チテ再ヒ之ヲ撫テ馬若安心セハ其ノ賞トシテ少許ノ食物ヲ與フヘシ續テ背ヨリ尻ヲ撫テ終ニ肢ニ至リ頸ヨリ頭

ニ及ホシ毛並ニ從ヒテ額、鼻梁、耳及鬣ヲ撫テ絶エス穩カナル音聲ニテ馬ヲ慰メ以テ其ノ親和ヲ求ムヘシ手入、銜換、鞍置等ノ場合ハ必ス此ノ方法ニ依リテ接近スルヲ要ス古馬ニ在リテモ馬ノ狀況ニ應シ概ネ之ニ準スルモノトス

總テ馬ニ接近スルトキハ馬ノ耳、眼及姿勢ニ注意スヘシ又咬蹴等ノ虞アル位置ニ立ツヘカラス。如何ナル場合ニ於テモ不意ニ接近スル事ナク音聲ヲ以テ豫告スヘシ然レトモ躊躇シツツ接近スルハ亦宜シカラス
二 肢ヲ舉クル法 新馬若肢ニ觸ルルコトヲ嫌ハサルニ至レハ之ヲ舉クルコトヲ教フヘシ其ノ方法ハ馬ノ後方ニ向キ舉ケントスル足ヲ毛並ニ從ヒテ撫テツツ之ヲ握リ此ノ肢ニ托スル體量ヲ他肢ニ移サシムル爲己ノ肩若ハ他手ヲ以テ少シク馬體ヲ推シ徐々ニ之ヲ舉ケ再ヒ地ニ下スヘシ而シテ從順トナルニ從ヒ漸次肢ヲ舉クル時間ヲ長クシ終ニ蹄ヲ鐵籠

ニテ敵キ裝蹄ノ作業ニ馴ラスヘシ
 總テ肢ヲ舉クルニハ不時ノ危険ヲ豫防スル爲馬ノ側ニ在リテ後方ニ向
 キ例ヘハ左肢ヲ舉ケントスルトキハ右足ヲ稍、後ニ開キ之ニ自己ノ體
 重ヲ支ヘ左手ニテ馬ノ肢ヲ舉クヘシ此ノ際馬若蹴リ或ハ打タムトスル
 トキハ速ニ右足ヲ軸トシテ外方ニ旋轉スルモノトス
 肢ヲ舉クル際馬若之ヲ嫌フトキハ温聲ヲ以テ百方慰撫ニ勉メ尙從ハサ
 ルトキハ食物ヲ與ヘテ專ラ之カ沈靜ヲ圖ルヘシ
 肢ヲ卸ストキハ俄ニ放ツコトナク靜ニ地ニ著ケシムヘシ
 三 厩内ニ於テ側方ニ寄ラシムル法 先ツ肩ノ傍ニ立チ片手ヲ以テ馬ヲ
 撫テ他手ヲ以テ輕ク馬ノ腹ヲ壓シ後軀ヲ側方ニ寄ラシメ然ル後再ヒ肩
 ヲ壓シテ前軀ヲ寄ラシメ終ニ單簡ナル指示ニテ寄り得ルマテニ之ヲ馴
 ラスヲ要ス

四 水勒ヲ裝スル法 左手ヲ以テ項革ヲ取り其ノ韁ヲ左腕ニ掛ケ馬頭ノ
 左側後ニ位置シ右手ヲ以テ馬ノ頭ヲ後方ヨリ抱擁シ其ノ食指ト中指ヲ
 馬ノ右銜受ニ入レテ口ヲ開キ靜ニ銜ヲ含マセ項革ヲ項ニ裝シ然ル後右
 手ヲ拔キテ頭絡ノ長短ヲ整フヘシ
 勒ヲ裝シ或ハ脱スルニハ總テ温和ニ之ヲ行ヒ耳其ノ他頭部ノ強壓ヲ戒
 メ鬃、鬣等ノ纏フヲ防クヘシ
 銜換ヲ容易ナラシムル爲口ヲ取ルコト頭及耳ニ觸ルルコトヲ十分馴
 ラスヘシ又銜ヲ嫌フ馬ハ水勒銜ヲ裝シタル儘飼付ヲ行フトキハ容易ニ
 馴ルルコトアリ

第二節 手 入

一 手入ハ馬體ノ垢ヲ去リ疲勞ヲ醫シ榮養ヲ助クルモノナルヲ以テ日々

十分ニ之ヲ行フヲ要ス

二 手入ハ浴ク全身ニ及ホシ些少ノ部分モ遺漏ナキヲ要ス

三 手入適當ナルトキハ鬣及尾毛ノ根ニ垢ヲ留メス指ヲ毛並ニ逆ヒ擦

過スルモ汚染セス且被毛ハ垢塵ノ跡ヲ殘サスシテ光澤ヲ帶ヒ馬體ニ密

著シアルモノトス

四 馬體中項、鬐甲、腋間、帶徑、陰部、繫等ノ局部ノ手入ハ往々粗漏

ニ陥リ易キヲ以テ特ニ注意セサルヘカラス馬體濕潤シ且泥土ニ汚染シ

タルトキハ藁ヲ以テ濕氣ヲ去リ泥土ヲ除去シタル後手入ヲ行フヘシ

五 手入前馬體ヲ検査シ若負傷部ヲ發見セハ其ノ部ニハ鐵櫛等ヲ使用ス

ヘカラス

六 手入具ハ成ルヘク各馬ニ一組ヲ定メ他馬ト混用セサルヲ可トス

○手入袋ハ根櫛、鐵櫛、毛櫛、木櫛及雜巾ヲ收容スルモノナリ

○鐵櫛ハ毛ノ纏ヲ解キ皮膚ノ垢ヲ搔キ起スモノナリ

○根櫛ハ鐵櫛ヲ用ウヘカラサル部分及鬣、鬣、尾等ノ垢ヲ擦リ去ルニ

用ウ

○毛櫛ハ全體ヲ擦リ鐵櫛、根櫛ニテ搔キ起シタル垢ヲ掃キ去ルニ用ウ

○木櫛ハ鬣、鬣、尾ヲ梳ルニ用ウ

○鐵篋ハ蹄裏ノ汚物ヲ除クニ用ウ

○雜巾ハ眼、鼻、口、肛門、陰部、四肢等ヲ拭フニ用ユ

○蹄洗桶ハ雜巾ヲ濯キ又ハ蹄ヲ洗フニ用ウ

○揉藁又藁束ハ毛櫛、根櫛又ハ鐵櫛ニ代用スルモノニシテ屢々之ヲ使

用シ殊ニ汗又ハ濕氣ヲ乾カスニ便ナリ

七 手入法ヲ分チテ普通ノ手入、演習後ノ手入トス

普通ノ手入ハ概ネ左ノ順序方法ニ依リ朝夕二回行フヲ例トシ而シテ

夕ノ手入ハ最モ丁寧ナルヲ要ス

一 水勒ニ銜換ヘ手入場ニ繫キ鐵櫛ヲ以テ體ヲ輕ク擦リ皮膚ノ垢ヲ搔キ起スヘシ其ノ順序ハ左ノ頸ヨリ始メ膊、肋、臂、股ノ順序ニ漸次ニ後方ニ至リ次テ右ニ廻リ臂ヨリ頸ニ及ホスヘシ

二 根櫛ヲ以テ鐵櫛ヲ用ヒサル部分ノ垢ヲ擦リ去ルヘシ

三 毛櫛ヲ右手ニ持チ鐵櫛ヲ左手ニ握リ毛櫛ニテ全體ヲ擦リ鐵櫛及根櫛ニテ搔キ起セル垢ヲ掃除スヘシ其ノ法ハ頭ヨリ始メ四肢ニ及ホシ毛並ニ逆ヒ又ハ斜ニ擦上ケ更ニ毛並ニ又ハ斜ニ擦下ケ數回此ノ操作ヲ重ネタル後毛櫛ヲ鐵櫛ノ齒ニテ輕ク擦リ其ノ垢ヲ去リ鐵櫛ニ溜リタル垢ハ時々敲キ落スヘシ
左手ニ毛櫛ヲ右手ニ鐵櫛ヲ取り手入スルコトニ慣ルレハ疲勞ヲ減シ馬體各部ノ手入ヲ均一ナラシメ得ルノ利益アリ

四 雜巾ヲ清水ニ浸シ屢々之ヲ洗ヒ堅ク絞リテ眼、鼻、耳、口、肛門、陰部等ノ順序ニ拭ヒ清ムヘシ

五 鐵籠ヲ以テ蹄裏ノ汚物ヲ除キ揉藁ニテ蹄壁ヲ擦リ清潔ナラシメ水ニテ洗フベシ

水ニテ洗ヒタル後塗油スヘシ

六 木櫛ニ水ヲ含マセ鬚、鬣、尾ヲ梳ルヘシ尾若泥ニテ汚レタルトキハ手ニテ揉去ルカ又ハ濕雜巾ニテ拭フヘシ
演習後ノ手入ハ概ネ普通ノ手入ニ準シ簡略ニ之ヲ行フヘシ

第三節 演習及行軍中ノ手入

右ニ於ケル手入法ハ時間ニ餘裕アリテ十分ニ手入ヲ爲スコトヲ得ル場合ノモノナルヲ以テ演習行軍等ノ場合ニ際シ僅少ノ時間ニ於テ行フ手入一

般ノ標準ヲ示スコト左ノ如シ

一 朝ノ手入

一 朝ノ手入時間ハ概シテ僅少ナルヲ以テ比較的最も肝要ナル部分ニ最モ充分ニ手入スルヲ肝要トス

第一 馬體ノ検査

第二 藁ヲ以テ全身ノ塵埃ヲ除去スルコト

第三 藁ヲ以テ四肢及蹄ヲ叮嚀ニ手入スルコト

第四 脊及帶徑ヲ手入スルコト

第五 蹄裏ノ泥土及汚物ヲ除去スルコト

以上ノ手入ヲ終リタル後尙ホ時間ニ餘裕アレバ漸次肝要ナル部分ヲ手入シ最後ニ鼻、口、眼等ヲ拭ヒ蹄ニ油ヲ塗ルベシ

二 行軍途中ノ手入

一 行軍途中ノ手入ハ勿論馬裝ヲ爲シタル儘行フモノニシテ、其方法モ場合ニ依ルヲ以テ一定スルコト能ハズト雖モ凡ソ標準ヲ示スコト左ノ如シ

イ 馬體及蹄鐵ノ検査

ロ 風塵烈シキトキハ、雑巾(成ルベク水ニテ濕シ)之ヲ以テ鼻、口、眼等ヲ拭フベシ

ハ 道路泥濘ノトキハ、鐵籠ヲ以テ蹄裏ノ泥土ヲ除去スベシ

ニ 四肢ノ血液ノ循環ヲ良クシ歩行ヲ輕クスルタメ何レノ場合ニ於テモ藁ヲ以テ四肢ヲ摩擦スベシ

三 宿營地到着後ノ手入

- 一 宿營地到着後ハ通常時間ニ餘裕アルヲ以テ規則通り叮嚀ニ行フベシ
- 左ニ最モ注意ヲ要スルモノヲ掲グベシ
- 二 全體及蹄鐵ノ検査ハ最モ注意シテ之ヲ爲スベシ、而シテ蹄鐵ノ改装又ハ釘緊メハ必ズ其ノ夜ノ中ニ行フベシ
- 三 項、頤、鬚、甲、徑帶、脊ノ不潔ハ擦傷ノ原因トナルヲ以テ充分叮嚀ニ手入スベシ
- 四 腰角ノ不潔ハ痒味ヲ生ズルヲ以テ、馬自ラ其部ヲ物體ニ擦付クルガ故ニ擦傷ヲ起スヲ以テ充分叮嚀ニ手入スベシ
- 五 繫ノ不潔ハ繫鞍ノ原因トナルヲ以テ充分叮嚀ニ手入スベシ
- 六 蹄部ノ不潔ハ蹄ノ病ヲ起ス原因トナルヲ以テ充分叮嚀ニ掃除シ、且成ルベク毎日一回ハ水ニテ洗フベシ（洗フ際繫マデ濕サヌ様注意スベシ若シ濕レタルトキハ藁ニテ摩擦シテ乾カスベシ）、水ニテ洗フハ蹄ヲ

- 濕メスタメニシテ、天氣續キニ石道等ヲ連日行軍スルトキハ蹄ガ乾キテ脆クナリ漸次小形トナリ、終ニハ缺ケ或ハ裂ケルヲ以テ洗ヒ去タル後其全ク乾カザル中ニ蹄油ヲ蹄ノ内外ニ充分ニ塗ルベシ
- 七 汗ノ乾キ方充分ナラザルトキハ、乾キ際ニ寒氣ヲ覺ヘ寒胃ニ罹ルコトアルヲ以テ藁ヲ以テ乾クマデ充分摩擦スベシ
- 八 四肢ハ行軍ニ際シ其使用最モ劇シキヲ以テ、體ヨリモ能ク手入スルコト肝要ナリ
- 九 尾ニ附着セシ泥土ハ乾キタル時掌ニテ揉ミ落スベク、若シ水ニテ洗ヒタルトキハ充分ニ其水氣ヲ取ルベシ、然ラザレバ尾毛ヲ腐敗セシムルコトアルヲ以テ能ク注意スベシ

第四章 馬蹄及蹄鐵

第一節 馬蹄ノ保持

一 馬ハ跣足ナルトキハ蹄ノ磨滅スルト成長スルト相平均スルヲ以テ蹄ハ自然ノ形ヲ保ツモノナレドモ、裝鐵スルトキハ蹄ハ成長スルモ磨滅スルコトナク遂ニハ姿勢ヲ變ジ歩法ニ變化ヲ來スヲ以テ、四週乃至六週ニ一回蹄ヲ截リテ改裝スルヲ要スルモノナリ

二 軍馬ハ常ニ乾燥ノ地ヲ運動スルヲ以テ、蹄ハ乾燥シ易ク漸次蹄ノ質ヲ脆弱ニシ又縮小シ易ク且蹄ノ底ト蹄鐵トノ間隙ニハ不潔物積リ易ク若シ之ヲ等閑ニスルトキハ白線ヲ腐敗シ蹄鐵ヲ支フル釘ヲ其位置ニ保ツコト能ハザルニ至ルベシ、故ニ毎夕手入ノ際蹄ヲ水ニテ洗ヒ不潔物ヲ除去スルト共ニ蹄ニ水分ヲ補給スルヲ要ス、冬期ニ際シ水洗困難ナルトキニ於テハ濕リタル布片ヲ以テ拭フヲ肝要トス、而シテ水分ヲ補

給スルモ漸次蒸發乾燥スルヲ以テ、之ヲ防グタメ水分ノ乾クヲ待テ蹄ノ裏及表ニ油ヲ塗ルベシ、又濕地或ハ雨雪ノ時運動スルニ際シテハ蹄ノ過度ニ水分ヲ吸收シ軟弱トナルヲ防グタメ運動開始前ニ油ヲ塗ルヲ要ス、此際古キ油ノ上ニ新シキ油ヲ塗ルハ益ナキノミナテズ反テ害アルヲ以テ古キ油ヲ除去シ然ル後新シキ油ヲ塗ルヲ要ス

三 蹄ニ油ヲ塗ルノ際往々外觀ノ美シキヲ欲シ、蹄壁ニノミ油ヲ塗リ裏面ニ油ヲ塗ラザルガ如キハ大ナル誤ナリ、何トナレバ蹄中水分ノ放出量及吸收量ノ最モ多キハ蹄又次ハ蹄底ニシテ最モ少ナキハ蹄壁ナレバナリ、故ニ油ヲ塗ルニハ蹄裏ヲ第一トシ次ニ蹄壁ニ及ボスベシ

四 前諸項ノ如クシテ充分蹄ヲ保護スルモ運動不十分ナルトキハ蹄ノ機能充分ナラズ、從ツテ蹄ノ成長不良トナリ、遂ニハ蹄ヲ縮少シ腐敗セシムルニ至ルヲ以テ、蹄ヲ健全ニ保持スルニハ適度ノ運動ヲ爲サシメ

ザルベカラズ、且劇シキ勞役ニ服セシメタル後愛馬心ヨリ慰勞ノ目的ヲ以テ急ニ長ク休養セシムルハ蹄ノ重症ヲ醸シ易キヲ以テ適度ニ輕キ運動ヲ爲サシムルコト必要ナリ

五 蹄鐵ノ検査粗漏ノ結果演習ノ際落鐵セシムルコトアリ、此落鐵ハ蹄ヲ害シ甚シキハ再ビ裝鐵シ能ハザルニ至ラシムルヲ以テ、乘馬前後ニハ必ズ蹄鐵ヲ十分綿密ニ検査スベシ

第二節 蹄鐵ニ付テノ注意及検査法

一 蹄鐵ノ効用ハ上來屢々述ベタル如ク、蹄鐵在リテ始メテ馬ヲ使用スルコトヲ得ルモノナルヲ以テ、蹄鐵ハ實ニ貴重ナルモノナリ、故ニ常ニ注意シテ落鐵ノタメ一時馬ヲ使用スルコトヲ得ザルガ如キコトアルベカラズ、検査ニシテ常ニ行届ケバ途中決シテ落鐵スルガ如キコトナ

キモノナリ

二 蹄鐵ハ通常六本ノ釘ニテ蹄ニ打着ラレ居ルモノナルガ故ニ此釘ガ抜ケルト落鐵スルヲ以テ、始終釘ニ注意セザルベカラズ

三 縦令へ釘ガ抜ケ居ラザルモ弛ムコトアリ、又釘ハ蹄鐵面ニ顯ハレタル部ヲ下ニ曲ゲテ持ダシアルガ故ニ其曲ゲタル部分ガ伸ビ、或ハ折レタル等ノ場合ハ新シキモノト打換ヘザルベカラズ

四 釘ハ六本完全ニ揃ヒ居ルトモ、蹄鐵全體ガ搖ミ蹄ト鐵トノ間ニ隙ヲ生ズルコトアリ、此場合ニハ釘ヲ緊メ直スカ又ハ釘ヲ打換ヘザルベカラズ

五 蹄鐵ガ磨滅シ蹄尖部ガ擦リ切レ蹄ガ直接地ニ着ク様ニナレルトキ及蹄鐵ガ折レタル場合ニハ全部蹄鐵ヲ改装ヒザルベカラズ
六 蹄鐵ヲ検査スルニハ、能ク土ヲ去リ綿密ニ點檢スベシ、尙ホ鐵篋ヲ

以テ蹄鐵ノ地ニ着ク部分ヲ敲クトキハ往々釘ノ弛ミヲ發見スルコトヲ得ルセノナリ

七 裝鐵ノ際完全ニ裝鐵セラレアルヤ否ヤヲ検査スルニハ左ノ要點ニ注意スベシ

イ 蹄ト繫トノ方向一致シアルヤ否ヤ

ロ 蹄冠ハ蹄壁ノ内外側ニ於テ其高サ同ジキヤ否ヤ

ハ 蹄鐵ハ蹄及肢ヲ正シク支撐スルヤ否ヤ

ニ 蹄鐵ノ剩餘適當ナルヤ否ヤ

ホ 釘ノ高サ正シク且蹄角ノ健康部ニ刺入シアルヤ否ヤ、釘ハ鐵ノ上十五乃至二十五密米ノ高キニ於テ蹄壁ニ出デ居ルヲ要ス

ヘ 釘節能ク蹄壁内ニ潜ミ込メルヤ否ヤ

ト 蹄ヲ擧ゲテ見ルトキ蹄鐵ハ負縁並ニ蹄踵ノ冠縁ヲ掩ハザルベカラ

ズ

チ 蹄鐵ハ蹄形ニ適合セザルベカラズ

リ 内鐵枝ノ外縁ハ下廣若クハ銳角ヲ爲スベカラズ

又 蹄鐵ト蹄底ノ間隔ハ四乃至五密米ナルヲ要ス

ル 鐵尾ハ蹄尾ヲ載スベカラズ

ヲ 最後ニ馬ヲ平坦地上ヲ牽キ蹄踏著ノ正シキヤ否ヤ及跛足ノ有無ヲ検査スベシ

第五章 馬匹ノ疾病及外傷

馬匹ノ疾病及外傷ニ關シテハ獸醫ノ掌ル所ナルモ、先ヅ各自ノ持馬ニ就テハ各自注意シテ之ヲ發見シ、若シ異狀アレバ直ニ上官ニ報告スベキモノトス

第一節 馬ノ診斷法

- 一 涙ヲ流シ眼脂ヲ出シ、眼ヲ半開ニスルハ眼病ノ徵ナリ
- 二 鼻孔内ノ甚シク乾キテ潮紅ナルカ、又ハ鼻ヲ垂ラスハ病氣ノ徵ナリ
- 三 呼吸ハ靜止セル時ハ一分間ニ七八ツ位ナリ、故ニ運動セザルトキ呼吸ノ劇シキハ病氣ノ徵ナリ、而シテ呼吸ノ數ヲ知ルニハ脾ニ依ルカ、又ハ鼻孔ニ手ヲ當テ、算フベシ
- 四 涎ヲ出シ、嚙換ヲ嫌フハ舌ニ傷ノアル徵ナリ
- 五 咳ヲスルハ病氣ノ徵ナリ
- 六 頭絡ヲ裝スルトキ、或ハ項ニ手ヲ觸ル、トキ之ヲ嫌フハ項ニ擦傷ノアル徵ナリ
- 七 馬ノ頭ヲ垂レ如何ニモ元氣ナク又人ノ近ツクモ依然トシテ頭ヲ上ゲ

- 八 馬體ノ一部ニ手ヲ觸ルルトキ、其部ヲ震動スルハ疼痛ノアル徵ナリ
- 九 長時間脱糞ナキハ熱病ノ徵、又糞ニ多クノ麥粒ヲ混ゼルハ不消化ノ徵、又下痢及糞ニ光澤ナク崩レ易キハ共ニ疲勞セルカ或ハ消化器ノ病ナリ
- 十 尿ノ濁リテ油ヲ滴ラスガ如ク力ナク出スハ、疲勞又ハ病氣ノ徵ナリ之ニ反シ尿ノ射出力強ク黄色ヲ帶ビ能ク清澄ナルモノハ健康ノ徵ナリ
- 十一 駐歩間後肢ヲ後方ニ踏張り、恰モ放尿ノトキノ姿勢ヲ爲スト、及歩行中其歩ノ運ビ重ク屢々追突スルハ共ニ疲勞甚シキ徵ナリ
- 十二 駐止間前肢ヲ以テ瀝板或ハ地面ヲ搔キ、腹ヲ見テハ幾度力伏臥セントスルハ疝痛ノ徵ナリ

十三 跛行スルハ其脚ニ故障アルモノナリ

十四 定量ノ飼料ヲ喰殘スハ不健康ノ徴ナリ

十五 其他馬體及舉動ニ常ニ注意セバ、故障ヲ發見スルヲ得ベク、外傷、皮膚病ニ至リテハ一見直ニ之ヲ知ルヲ得ベシ

第二節 馬ノ病傷及應急處置

一 寒胃ハ、氣候ノ劇變、極寒ノ際冷氣ニ當リ、或ハ發汗後手入不充分或ハ運動後直ニ鞍ヲ卸シ手入ヲ爲サバ等ヨリ起ルモノナレバ注意セザルベカラズ、之ガ手當ハ寢蓐ヲ充分ニ與ヘ防寒毛布ヲ以テ被ヒ成ルベク風ニ當ラヌ様ニシカメテ温暖ナラシムベシ

二 疝痛ハ、極寒ノ時殊ニ雨雪天ノ時長ク運動セザルカ、或ハ食滯ヨリ起ルモノナレバ、飼料ノ分量ト運動ヲ適度ニシテ之ガ豫防ニ注意セザ

ルベカラズ、之ガ手當ハ獸醫ノ診斷ヲ待ツ間馬頭ヲ高ク釣り藁ヲ以テ腹部ヲ充分ニ摩擦シタル後毛布ヲ着セテ牽運動ヲ行フベシ、脱糞スルニ至レバ稍輕快トナリタル徴ナリ、而シテ此病ハ甚シキハ手當ヲ遅レタルトキハ一時間ヲ出ズシテ斃死スルコトアルヲ以テ、最モ恐ルベク最モ注意スベキ病ナリ

三 眼病ハ、自然ニ起ルモノニシテ、之ヲ防グベキ手段ナク、其手當ハ清水ヲ以テ輕ク之ヲ洗ヒ冷却スベシ

四 口創ハ、恐怖シ易キ馬、又ハ頭ヲ上ゲテ反ル癖ノアル馬等ガ銜ヲ裝シテ繫ガレタル場合、若クハ騎手が烈シク馬口ニ當リタルトキ等ニ於テ生ズルモノナレバ、成ルベク野繫ノ銜ヲ脱ヅシテ繫ギ、又成ルベク其前ヲ多クノ馬ガ通行セヌ所ニ繫グヲ可トス、而シテ騎手ノ馬口ニ烈シク當ルガ如キハ嚴禁セザルベカラズ、之ガ手當ハ乾草ヲ避ケ成ルベ

ク青草ヲ與へ、尙ホ爲シ得レバ麥ヲ穀等ニ混シ練飼ニシテ與フルヲ可トス

五 打撲、捻挫ハ、不意ニ起スモノニシテ、冷却シテ手當スベシ

六 冠膝ハ騎手ノ不注意ヨリ起ルモノニシテ、若シ重キ冠膝ニ罹リタル

馬ハ縦令全快スルトモ、前肢ガ弱クナリ蹉躓キ易クナルガ故ニ注意セ

ザルベカラズ、馬ガ蹉躓キタルトキハ輻ヲ控ヘルト同時ニ膝ト脚ヲ以

テ馬ヲ抱キ起ス様ニスベシ、之ガ手當ハ直ニ下馬シ、清水ヲ以テ能ク

洗ヒ土砂等ノ創口ニ殘ラザル様ニシ、繃帶其他清潔ナル手拭ヲ以テ卷

キ、而シテ成ルベク速ニ治療ヲ受クベシ

七 馬具、鞍具ニ依リテ生ズル、鞍傷、擦傷、膿瘡、帶徑傷、項傷ハ、

馬具鞍具ノ手入不良ト、其裝法ノ正シカラザルト、騎手ノ姿勢不良ト

ニ因リ起ルモノナレバ、注意セザルベカラズ、之ガ手當ハ水ヲ以テ冷

却スベシ

八 蹄炎ハ、蹄ノ全部ニ熱及疼痛ヲ生ズルモノニシテ、其重キモノハ歩

行ニ堪ヘザルモノニシテ、堅キ石道等ヲ長時間急速ノ歩度ヲ以テ騎行

シタルトキ等過度ノ勞役、若クハ穀類ヲ過量ニ食シタル等ノタメ起ル

モノナリ、之ガ手當ハ晝夜共冷水ニテ冷スベシ

九 裂蹄ハ、蹄ノ開裂スルモノニシテ、布ニテ堅ク縛ルベシ

十 蹄又腐爛ハ、蹄又ノ中ヨリ惡臭アル鼠色ノ汁ヲ出シ、重症ニ至レバ

蹄又脱落ス、之レ手入不充分ニシテ蹄裏ニ汚物ノ滯留又ハ裝蹄法ノ不

良ヨリ生ズルモノナリ、之ガ手當ハ蹄又ヲ能ク水或ハ石炭酸水ニテ洗

ヒ、蹄又ノ中ニ食鹽水ニテ浸シタル布片ヲ詰メ置クベシ

十一 蹄冠擦傷ハ、野外ニ於ケル馬ノ繫ギ方ノ不注意、或ハ荆棘中ヲ

跋涉スル際蹄冠部ニ生ズル外傷ニシテ、甚シキトキハ裂蹄ノ原因ト

ナリ容易ニ治癒セザルモノナリ、之ガ手當ハ冷却スベシ

十二 踏創ハ、跛行スルモノニシテ、釘、竹、木片等ノ蹄裏ニ刺込マレ

タルモノニシテ、森林、竹藪、村落等ヲ騎行スル際ニ多ク生ズルモノナリ、之ガ手當ハ蹄裏ヲ綿密ニ検査シテ、其物體ヲ抜取ルベシ

十三 蹴傷、咬傷ハ、多ク不注意ヨリ生ズルモノナリ、之ガ手當ハ清水

ニテ能ク洗ヒ綿帯シ得ル部分ハ成ルベク綿帯シ、冷水ニテ充分冷スヘシ

十四 皮膚病ハ、多クハ皮膚ノ不潔ヨリ生ズルモノニシテ最モ多キヲ「繫

戰」トス、繫戰ハ手入ノ不良、或ハ繫部濕後ノ拭淨不十分ナルタメ、或ハ装鐵ノ不工合等ヨリ蹄部ニ生ズル「アカギレ」ノ如キモノニシテ、容易ニ治癒シ難ク、又其重キモノハ步行シ能ハザルニ至ル、能ク注意スベク殊ニ寒中ニ於テ然リトス、雨雪天ノトキハ僅カノ休憩ノ間ニモ

其部ノ手入ヲ心懸ケ、藁デモ草デモ得ラル、モノヲ以テ拭ヒ去リ、濕リタル儘寒風ニ曝シ置クハ最モ不良ナリ、又繫部ノ毛ヲ刈ルコトハ嚴禁ナリ、而シテ一旦繫戰ニ罹リタル上ハ直ニ獸醫ノ指圖ヲ受ケ又手入ノ際ハ柔和ニ取扱フベシ

第三節 馬ノ傳染病

一 馬ノ傳染病ニハ、炭疽、鼻疽、皮疽、腺疫等アリ、通常左ノ徴ニ依リ考察スルコトヲ得

イ 炭疽 眼色赤色ヲ帯ビ口内乾燥シ馬房内ニテ騷擾シ、口、鼻、肛門ヨリ血液ヲ混ジタル汁ヲ滴ラスモノニシテ、人ニモ傳染ス

ロ 鼻疽、皮疽 鼻或ハ馬體殊ニ頤凹及腋下ニ腫物ヲ生ジ、漸次化膿シ、尚ホ鼻疽ハ膿ヲ混ジタル鼻汁ヲ流ス

ハ 腺疫(偶兒漢) 頭凹ニ腫物ヲ生ジ、鼻汁ヲ流シ、咳ヲ爲シ食慾ヲ

減少スルモノナリ

二 傳染病ナルコトヲ發見シ、若クハ疑ハシト認メタルトキハ、決シテ猶豫セズ、又姑息ノ處置ヲ爲サズ、直ニ上官ニ報告シ、獸醫ノ診斷ヲ受クベシ、若シ猶豫姑息ノコトヲ爲セバ大害ヲ來スベシ注意セザルベカラズ

第六章 馬具ノ名稱

第一節 乘馬具ノ名稱

一 乘馬具ノ名稱左ノ如シ

馬具トハ乘取或ハ繫駕、馱載ニ使用スル器具ノ總稱ニシテ馬體及乘取者ニ密接ノ關係ヲ有シ其ノ構造、裝脫法ノ適否並手入ノ良否ハ馬ノ活動及乘取ノ便否ニ影響スルコト頗ル大ナルモノトス

一 三十年式乘馬具

三十年式乘馬具ハ左ノ部具ヨリ成ル

乘鞍

附隨品

屬品

勒、鐙、鐙革、腹帶、鞍囊、蹄鐵囊、鞍下毛布、豫備轡鎖、膝覆、旅囊、馬糧囊、麥袋、水囊、野繫勒、鞍覆、野砲兵、騎砲兵、重砲兵、緊駕スル場合ニ限ル、隊ノ車長及其ノ他車輛編制ノ隊ニ屬スル軍曹以下乘馬者用、縛具革條、近衛騎兵、聯隊用

其 一 乘鞍

乘鞍ハ乘取ヲ便ニシ馬背ヲ保護シ負擔ニ便ナラシムルモノニシテ鞍及鞍褥ヨリ組成セラレ鞍ハ更ニ鞍骨及騎坐ヨリ成ル

鞍骨ハ鞍ノ基礎ヲ爲シ且屬具ノ裝著ヲ便ナラシムルモノニシテ其ノ木部ハ山毛榉ヲ以テ之ヲ製シ前橋、居木及後橋ノ三部ヨリ成リ其ノ外面ハ薄麻布ニテ包ミ漆塗トシ以テ防腐ノ保護ヲ施シ抗力ヲ増加セリ

其二 附隨品

附隨品中草具ハ概ネ褐色多脂牛革ヲ用キ鐵具ハ銜、鑿、轡鎖ヲ除ク外鍍錫ス

一 勒 勒ハ騎者ノ意思ヲ馬口ニ感セシムルモノニシテ頭絡、銜、轡轡鎖ヨリ成ル

イ 頭絡 馬頭ニ纏絡シ銜ヲ吊リ之ヲ馬口内ニ留ラシムルモノニシテ項革、頰革、額革、鼻革、咽革、頤革ヨリ成ル

ロ 銜 大勒銜、小勒銜ヨリ成ル

ハ 轡 拳ノ動作ヲ馬口ニ傳フルモノニシテ大勒轡及ヒ小勒轡ヨリ

成リ大勒轡ハ其ノ兩端ヲ大勒銜ノ轡鎖ニ附著シ其ノ中央ハ之ヲ縫綴シ遊環革ヲ附ス小勒轡ハ其ノ兩端ヲ小勒銜ノ鑿ニ附著シ其ノ中央ヲ縫綴ス

ニ 轡鎖、鐵製ノ複鎖連鑿及鈎ヨリ成リ適度ノ緊張ニ依リ銜ノ效驗ヲ呈セシム

二 鑿 鞍ニ裝著シテ騎手ノ乗降ヲ便ニシ且脚ノ重ミヲ支ヘ騎手ノ動作ヲ容易ナラシムルモノナリ

三 鑿革 鑿ヲ懸吊スルノ用ニ供ス

四 腹帶 鞍ヲ馬背ニ裝定スルノ用ニ供スルモノニシテ細キ麻繩ヲ以テ組製ス而シテ其ノ兩端ヲ分岐シ各先端ニ鑿鎖ヲ附著シ裝著ニ便ナラシム

五 鞍囊 褐色牝牛革製ノ囊及蓋ヨリ成リ戰時携帶品ノ一部ヲ收容ス

輜重兵須知

三〇二

ルノ用ニ供スルモノニシテ鞍囊、駐鎖及二條ノ縛囊、革條ヲ以テ鞍ノ前橋上ニ裝著ス

六 蹄鐵囊 豫備蹄鐵ヲ各馬ニ携帶セシムルノ用ニ供スルモノニシテ方形ノ薄麻布製トス

七 鞍下毛布 馬背ト鞍トノ適合ヲ調和シ以テ馬背ノ擦傷ヲ豫防シ且鞍褥ノ汚汗ヲ防ク

其ニ屬品

屬品ハ左ノ如シ

- 一 膝履
- 二 旅囊
- 三 馬糧囊
- 四 麥袋及水囊

輜重兵須知

三〇三

- 五 野繫勒
- 六 鞅具
- 七 縛具、革條

二 砲兵鞅馬具

砲兵鞅馬具ハ左ノ部具ヨリ成ル

服馬具

服馬鞍

附隨品 勒、鏡、鏡草、腹帶、鞍囊、鞍下毛布、豫備轡鎖

鞅具 前馬頸上革、後馬頸上革、首革、緩喉革、平長革、擔鈎、鞅革

鞅索、鞅鎖、鞅革控革、鞅革鈎革、袴革、袴革鈎革、鞅、鞅

褥革、束索革條

屬品 驂馬鞭、韁、駐鎖、脛當革、膝履、馬糧囊、麥袋、水囊、野繫

勒、縛具草條

驂馬具

驂馬鞍

附隨品

鞅具

驂馬勒、腹帶、鞍下毛布
前馬頸上革、後馬頸上革、首革、緩喉革、平長革、擔鈎、鞅革
鞅索、鞅鎖、鞅革控革、鞅革鈎革、袴革、袴革鈎革、鞅、鞅
褥革、束索革條

屬品

驂馬旅囊、馬糧囊、麥袋、水囊、野繫勒
砲兵鞅馬具ハ前記ノ諸部具ヲ結合シ鞅馬ヲ砲車又ハ車輛ニ駢繫スルノ
用ニ供スルモノニシテ後馬ヲ除キ中馬及前馬ノ同一ノ鞅具ヲ使用ス

第七章 馬具ノ手入法

第一節 手入一般ノ注意

- 一 手入ノ良否ハ保存ニ大ナル關係アリ、又馬體ニ影響スルコト著大ナルヲ以テ常ニ注意シテ叮嚀ニ行ハザルベカラズ
- 二 總テ革具ハ、常ニ平滑ニシテ光澤ヲ有セザルベカラズ
- 三 總テ屈撓力ヲ受クル革條ハ、充分ニ脂油ヲ含ミ常ニ柔軟ナルベキコト
- 四 總テ革ヲ以テ縫ヒアル部分ハ、強ク摩擦スベカラザルコト
- 五 總テ手入ノ際摩擦製ノモノニハ、決シテ脂油ヲ附着セザル様注意スベキコト
- 六 手入ニ用フル脂油ハ、鯨油、馬油、揮發油、鑛油等トス

第二節 演習後ノ手入法

一 革具ハ、乾キタル布片ヲ以テ十分拭淨シ汚垢ヲ去リ、尙ホ要スルトキハ手入用ノ脂油ヲ含マシタル布片ニテ能ク拭淨シ次ニ乾キタル布片ニテ能ク拭淨スベシ、殊ニ馬體ニ接シタル部分ハ最モ能ク拭淨スベシ

二 雨或ハ雪ニ濕レ、又ハ泥土等ノ附着セル革具ハ砂塵ノ附着セザル難巾ヲ以テ拭淨シタル後風通シ能キ日陰ノ場所ニ乾シテ其全ク乾カザル前ニ脂油ヲ塗り、其脂油ノ革具ニ滲ミ込ムヲ待チテ更ニ乾キタル布片ニテ拭淨スベシ

三 鞍褥、鞍下毛布、腹帶等馬ノ汗ニ濕レタルモノハ使用後直ニ日ニ乾シタル後能ク其塵埃ヲ除去スベシ

四 金屬具ハ、藁又ハ乾キタル布片ヲ以テ汚垢塵埃ヲ去リ僅カニ脂油ヲ塗り錆ノ生ズルヲ防クベシ但シ鍍錫セルモノニハ脂油ヲ塗ルベカラズ

第三節 細密手入法

一 革具ハ、各部ヲ分解シテ充分汚垢ヲ除去シ乾キタル布片ヲ以テ濕氣ヲ去リタル後脂油ヲ塗り充分其脂油ノ滲ミ込ミタル後乾キタル雑巾ヲ以テ充分ニ摩擦スベシ、而シテ鞍ノ托革及鍍革其他ノ小草條ニハ殊ニ能ク脂油ヲ塗ルベシ

二 平長革ノ如キ、數枚ノ革ヲ縫ヒ合セタル革具ニハ充分脂油ヲ塗ルベシ、若シ要スルトキハ若干分時間脂油ニ浸シテ脂油ヲ吸ヒ込マシメ、若干時間(成ルベク翌日ヲ可トス)ヲ經タル後乾キタル布片ヲ以テ強ク摩擦シテ滑カニシ光澤ヲ生ゼシムベシ

三 鞍及鞍囊ハ、能ク拭淨シテ汚垢ヲ去リ、而シテ鞍ハ裏面ヨリ脂油ヲ吸ヒ込マシムベシ

四 旅囊、腹帶及毛布ヲ、石鹼ヲ以テ洗ヒタルトキハ乾キタル後充分ニ揉ミ軟柔ナラシムベシ

第十三章 馬具ノ裝法

第一節 馬具裝法一般ノ注意

- 一 鞍下毛布ハ、最初正シク折目ヲ付ケ屢々折返サバ様ニスベシ、屢々折返シ折直ストキハ自然其度毎ニ折目ガ異リ之ガタメ毛布ノ落付キ悪クナリ終ニハ皺ヲ生ズル様ニ至ルモノナリ、但シ汗ノ爲ニ毛布ノ濕リタルトキハ折返シテ乾キタル方ヲ馬體ニ接セシムベシ
- 二 鞍下毛布ノ塵埃ハ馬背ヲ傷クルコトアルヲ以テ裝着スルトキ必ず能ク振フベシ
- 三 對扣革或ハ其他ノ革條ノ端ガ鞍ノ下ニ挟ミ込マレサル様注意スベシ

是レ馬體ヲ傷クレバナリ

- 四 腹帶ヲ緊メル度合ハ最も大切ナルコト、ス、緩キニ過グレバ鞍ガ動キ易ク、緊キニ過グレバ帶徑ヲ傷クルヲ以テ注意セザルベカラズ
- 五 腹帶ヲ緊メルトキ甚タシク腹ヲ膨脹スル癖アル馬ハ、一度ニ腹帶ヲ緊メズ率出シタル後更ニ緊直スベシ
- 六 雑巾、麥囊等ヲ規定ノ場所ニ納ムルヲ怠リ、一時假リニ鞍ノ下等ニ挟ミ置キ終ニ之ヲ方附ケルコトヲ忘レ爲ニ馬體ヲ傷クルコトアリ注意スベシ
- 七 旅囊ノ中ニ收容スル物品中ニハ、鐵櫛ノ如キ凹凸ノアルモノアルヲ以テ是等ノモノハ他ノ物品ト取混ゼテ成ルベク平ニ納メ馬體ニ障ラザル様注意スベシ

第二節 乘馬具ノ裝法

一 馬ニ乘馬具ヲ装着スルニハ、先ヅ寢張綱ヲ水勒ニ啣換ヘ馬ヲ前ノ方ニ向ケ頭ヲ少シク揚ゲテ繫ギ然ル後

第一ニ鞍下毛布ヲ置ク、毛布ハ能ク之ヲ振ヒ布片ノ表ニ出サヌ様ニ隅々ヲ正シク四折ニ疊ミ（毛布ニ線條ノアルモノハ其隊ノ規定ノ如ク一方ニ向ケ）其中央ヲ馬ノ脊線ニ合セ最初ハ適當ノ位置ヨリ少シ前方ニ置キ次ニ毛並ニ後方ニ滑走シテ馬毛ヲ落チ付ケ馬毛ノ逆立スルヲ防ギ適當ノ所ニ置ク、而シテ鞍ヲ置キタル後前（警甲部）ヲ鞍ノ前橋ニ付クマデ引下ゲテ鞍下毛布ノ警甲部ニ接觸セザル様スベシ、鞍下毛布ハ一旦置キタル後ハ決シテ其儘左右ニ動カスベカラズ

第二ニ鞍ヲ置ク、先ヅ鍔及腹帶ヲ鞍背ニ掛ケ置キ、鞍ノ前橋ト後橋ヲ

持チ馬ノ左側ヨリ靜カニ馬背ニ置ク、此時鞍褥ノ前（前橋ノ肩胛骨ノ上端ヨリ約二本ノ指丈後方ニ在ラシメ又左右ニ傾カザル様注意スベシ

第三ニ腹帶ヲ緊ム、馬ノ右側ニ至リ徐ロニ最初緩ク緊メ漸次一孔ヅ、緊メ決シテ俄カニ緊ムベカラズ、而シテ腹帶ハ正シク帶徑ニ在ル如ク且ツ馬毛ノ逆立タザル様注意スベシ、緊メタル後左右兩手ノ食指ト中指トヲ腹帶ト馬腹ノ間ニ挿入シ馬腹部ノ皺ヲ漸次上方ヨリ下方ニ擦下グベシ

腹帶ノ度ハ前記ノ二指ノ挿入シテ擦リ下グルトキ甚シク窮屈ナラザルヲ適度トス

第四ニ水勒ヲ頭絡ニ換ユ、其法左ノ如シ

馬ノ左方ニ在リテ前方ニ面シ頭絡ヲ左方ニ持チ、輻ノ中央ヲ左肘ニ掛ケ右食指ヲ馬ノ右側唇ト縫接部ニ入レテ齒ニ觸レザル如ク保持シ

左手ニテ水勒ヲ脱シ徐ロニ大勒銜、小勒銜ヲ馬口ニ銜マシメ項草ト額草トノ間ニ兩耳ヲ入レ前鬚ヲ引出シ喉草ヲ一拳ヲ入レ得ルヲ度トシテ之ヲ控着シ兩韁ヲ馬頭ヲ越シテ頸上ニ掛ケ然ル後轡鎖ヲ掛ク
ルモノトス

頭絡ヲ装スル際ニ於ケル注意左ノ如シ

イ 頬草ハ、銜ヲシテ馬口内適度ノ高サニ在ラシムル如ク定ムルコト、即チ小勒ナレバ其銜ハ輕ク口角ニ接シ唇ヲ甚シク壓迫セザルコト、大勒ナレバ其銜ハ犬齒ニ解レズ又口角ニ觸レザルコト、又大小勒ヲ共ニ銜マシムルトキハ大勒銜ハ犬齒ノ上方約指一本幅ニシテ正シク銜受ニ當リ、小勒銜ハ大勒銜ノ稍上方ニシテ韁ヲ緩メアルトキ、小鞍銜ノ中接續部ハ大勒銜ノ寬舌ヨリ約指一本幅出テ居ル様スベキコト

ロ 喉草ハ、咽喉ト喉草トノ間ニ一拳ヲ入レ得ルコト

ハ 轡鎖ハ、充分燃回シテ平ニシ其餘リタル部分ハ兩方ニ齊シク垂レ、正シク頤凹ニ置キ鎖ノ中央ノ太キ部分ハ頤凹ノ中央ニ在リテ韁ヲ緩メタルトキ、腮トノ間ニ二本ノ指ヲ入レ遊動シ得ル如ク装シ、又韁ヲ控ヘタルトキ銜枝ト頬草ノ延伸線トニテ大約四十五度ノ角ヲ爲スヲ以テ適度トス

二 乘馬具ヲ解脱スルニハ装スルトキト反對ノ順序ニ行フモノトス

第二節 輓馬具ノ裝法

一 輓馬ニ輓具ヲ装スルニハ通常服馬ヨリ始ムルモノトス、其法鞍ヲ裝シタル後緩喉草ノ折レ目ヲ手前ニシ後馬ニ在テハ首草ト共ニ馬ノ頭ヲ通シテ頸上ニ至ラシメ輓具ヲ鬚毛ノ方向ニ旋回シテ緩喉草ヲ馬胸ニ當

テ頸上草ノ對控革ヲ前橋ノ頸上草托鑲ニ控着シ次ニ「ホルトレー」ノ提子ヲ鞍ノ托革ニ控着シ次ニ「ホルトレー」ヲ控着シ鑲ヲ下ロシ次ニ鞅ヲ裝シ束索革條ヲ以テ鞅索ヲ定着スルモノトス
驂馬ハ服馬ノ如ク鞅具ヲ裝シタル後驂馬輻ヲ右方ノ鑲ニ通シテ着ケ、次ニ索輻ヲ着クルモノトス

ニ 鞅具裝着ノ要旨ハ馬匹ヲシテ其鞅力ヲ最大限ニ發展セシムルト同時ニ擦過傷ヲ生ゼシメザルニアリ、而シテ其裝法ハ馬匹ノ大小ニ依リ酌スベキモ概ネ左ノ諸件ニ注意スルヲ要ス

イ 緩喉革ハ、低ニ過グレバ馬肩ノ運動ヲ妨ゲ、高キニ過グレバ呼吸ヲ困難ナラシム、然レドモ長時間ノ行軍演習等ニアリテハ適宜其位置ヲ上下スルコトアリ、要スルニ水平ニシテ其下線ハ肩端ノ上方約指二本ノ所ニ在ルヲ適度トス

ロ 首革ハ、轅桿ヲ殆ド水平ナラシムル様ニ定ムルモノトス、即チ緩喉革ノ好位置ニアルトキ鬣毛上一拳ヲ入レ得ルヲ以テ適度トス

ハ 平長革、袴革、鞅革ノ高サハ、緩喉革ト略同水平線ニアルヲ適度トス、又袴革ト臀部トノ間ニハ一拳ヲ入レテ自由ニ動カシ得ルヲ適度トス

ニ 鞅ハ、鞅褥革ノ下ニ一拳ヲ入レ、又鞅ノ尾圈ト尾根ノ下端トノ間ニ約三指ヲ入レ得ルヲ適度トス、而シテ鞅ハ、鞍ノ前ニ滑出スルヲ防グ爲ノモノニアラズシテ袴革、或ハ袴革鉤革等ヲ常ニ適度ノ高サニ維持スルモノナルコトヲ忘ルベカラズ

ホ 「ホルトレー」ハ、緩喉革、平長革ノ位置ヲ保タシムルモノナレバ其長ハ頸上草及鞅革鉤革等ト相待テ鞅革及平長革ヲ一直線ナラシムル様定ムベキモノトス

へ 各馬ノ鞅革、鞅索ハ、繫駕シテ鞅曳ノ姿勢ニアルトキ前馬、中馬、後馬各々其方向ノ異ナルコトナク前馬ノ鞅革頭ヨリ後馬ノ鞅索端ニ至ルマデ一直線ナラザルベカラズ

ト 驂馬韁ハ、其長サハ牽韁ヲ控へ、驂馬ヲシテ收縮ノ姿勢ヲ執ラシムルモ尙ホ馬ノ頭及頸ハ真直ナラザルベカラズ

チ 總テ諸革條ノ馬體ニ接スル部ニ於テハ馬毛ヲ其毛並ニアラシムルコト及頸上革ノ下ニハ鬣毛ノ逆立セザルコトニ最モ注意セザルベカラズ

第四節 馱馬具ノ裝法

一 馱馬具裝法ノ要旨亦馬匹ヲシテ其馱載力ヲ最大限ニ發展セシムルト同時ニ擦傷ヲ生ゼシメザルニ在リ、而シテ裝法ハ馬匹ノ大小ニ依リ酌

酌スヘキモ特ニ左ノ諸件ニ注意シ、乘馬具及鞅馬具裝着ノ要領ニ準據シテ之ヲ行フベシ

イ 緩喉革ノ位置ハ、鞅具ト同様ニシテ、馬ヲ牽クトキハ緩喉革托環ノ一邊垂直ト爲リ駐止スルトキハ緩喉革ト馬體トノ間ニ一拳ヲ入レ得ルヲ適度トス

ロ 袴革ハ、後方ニ少シク傾斜スル如ク臀部ノ稍下方ニ裝シ、袴革ト臀部トノ間ニハ一拳ヲ入レ得ルヲ適度トス

ハ 鞅ノ度合ハ、鞅具ト同様トス

ニ 馱載物ノ重量ハ、決シテ一方ニ偏スルコトナク、扱褥ノ左右前後ニ平等ニ分配スベキコト

ホ 韁ハ、牽韁ヲ控へ馬ニ收縮ノ姿勢ヲ執ラシメタルトキ少シク弛ムヲ適度トス

第五節 行軍演習間馬裝ノ検査

及注意

- 一 馬匹ニ對シ完全ニ馬具ヲ適合セシムルト雖モ、其馬裝ノ常ニ完全ナルコトニ注意ヲ缺クトキハ忽チ馬體ニ傷ヲ生スヘシ、故ニ行軍演習等ニアリテハ休憩時間ヲ利用シテ馬裝其他ヲ綿密ニ検査シ之ヲ直サルベカラズ
- 二 検査ハ第一蹄鐵、第二四肢、第三鞍、第四鞍下毛布、第五腹帶、第六頭絡ノ順序ヲ以テシ尙ホ時間ノ餘裕ニ從ヒ逐次其他ノ部分ヲ綿密ニ點檢スベシ
- 三 後蹄ヲ検査スルトキハ、成ルベク隣兵ト申合セ韁ヲ持合ヘシ、是レ検査中隣馬ト咬合スルコトアレバナリ
- 四 鞍ハ其位置正シクトモ、腹帶ノ度合ハ必ズ検査スベシ

- 五 鞍下毛布ハ鞍ノ前橋ノ部分ガ能ク引上リ居ルヤ否ヤニ注意シテ検査スベシ、若シ毛布ガ警甲部ヲ壓迫スルトキハ、腹帶ヲ解キテ毛布ヲ引上グベシ

輜重兵須知終



質 疑 規 程

- 一 此須知ニ記載セサル軍事學又ハ須知記載事項中了解不明瞭ノ件ハ本券ニ依リ質問シ得
- 二 質疑事項ハ單簡明瞭書體ヲ正確ニ記スヘシ
- 三 本券ヲ終了シタル時ト雖モ何回ニテモ本券ヲ添ヘ別紙ニテ質問シ得
- 四 質疑手数料一回 金拾貳錢 (三錢郵券四枚封入) 質疑ノ都度納付スルモノトス
- 五 一回三問以内トス
- 六 住所氏名ハ特ニ明記スヘシ

大正四年十月

東京麴町區九段偕行社隣

差 出 所 軍 友 協 會 編 纂 部

輜重兵 須知質疑用紙 賺讀者ニ限リ (一回三問以内)
同輸卒 質問ヲ爲シ得

氏名	住所 所屬	解	答	問	質
	輜重兵 大隊第 中隊				

大正四年十月二十八日印刷
 大正四年十一月十二日發行

定價金三十錢

郵税金六錢

不許複製

東京市麴町區飯田町二丁目五十番地

發行兼 編纂者 軍友協會

代表者 龜岡泰躬

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地

印刷者 天沼藤太郎

東京市芝區櫻田太左衛門町七番地

印刷所 英舍

東京市麴町區飯田町二丁目五十番地

發行所 軍友協會

軍友協會發行

須知類

步	騎	砲	輜	輸	工	馬
兵	兵	兵	重	卒	兵	事
須	須	須	兵	須	須	提
知	知	知	須	知	知	要

定價金二十五錢
郵稅金六錢

定價金二十錢
郵稅金右同

定價金二十錢
郵稅金右同

定價金二十錢
郵稅金右同

定價金二十五錢
郵稅金右同

定價金二十錢
郵稅金右同

定價金二十五錢
郵稅金右同

終